
現写録～現に生ける～

寿甘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現写録〜現に生ける〜

【Nコード】

N7430H

【作者名】

寿甘

【あらすじ】

『僕』が出会う『おとぎ話』、『伝奇』、『物語』の存在。現代は幻想に蝕まれてる？ 幻代活劇始まります

鬼『子』の眼にナミダを

壺

三石きこという少女は僕にとって『隣人』だったのだろう。

そして、彼女にとっても僕は『隣人』だったのだろう。

この二年間、同じクラスなれど会話もろくにした時もなく、しようとも思わなかった。いや、純然たる男子高校生としては女の子の友達、知り合いは数多い程、自分の価値を高めるものであるからコミュニケーションを取ろうとしたという記憶はある。

結果から言えば『成功』だった。入学当初、適当に釣るんだ男友達と女子の輪に突入して友達になろう、という建前で『彼女候補』を目利する為に、テキトウに適当な女子グループに話し掛けに行った。

そこに彼女、三石きこは『普通』『当前』にいた

第一印象と言えば『何も覚えてない』というのが正直なところである――いや『印象がない、特徴がない』というのが第一印象だったのかもしれない（単に隣にいた、なかなかの事が気になってただけかもしれないが）

まあ、我が勇気ある足軽部隊は、その女子グループとファーストコンタクトして、携帯番号も入手する事を成功したのだが――三石キコとは、それだけだった。

携帯の番号を交換したその夜に、挨拶がわりにメールを送ったのだが、メールが送れなかったのである。その時はアドレスの打ち間違いか、と思い、明日にでも、また聞けばいいか。なんて思ったのだが、次の日には、そんな事も僕は忘れていた。

そう、前に述べたように、結果は『成功』だった。

だって、三石きこという存在は、僕にとって『成功』にも『失敗』にも区別されてなかったのだから。

それ程にまで僕にとって、彼女の印象、彼女の存在は、『どうでもいいもの』だったのだ。

その後も、文化祭、体育祭といった、学級一体になるイベント以外では、会話なんてろくにせず、いや、文化祭、体育祭の時さえも会話なんてろくにせず、この二年間を過ごしてきた。

僕は、ななかの存在に目移りしながらも、平凡な男子高校生として生活し、たぶん、三石きこも、誰かの存在を気に掛けながら、平凡な女子高校生として生活していたのだろう。

だから、今から述べるのは、とある切っ掛けで、彼女の存在を、彼女を『三石きこ』という一個人として認識した、後の話である事を念頭に入れてほしい。

三石きこは、友達が多い訳ではなかった。どちらかと言ったら独りで居る事が多く、たまに近くの席にいる女子や、ななかと会話する程度で（会話といっても、明日のテストの範囲とか教科書の貸し借りといった、会話ともいえない会話な内容が多かったが）、昼食時も、すぐに教室を抜け出して、屋上で独りで昼食を摂っていた。勉強もそこそこ出来るみたいで、学内ランクをみると、総合で三十番台には入る程の、頭の良さである（蛇足ではあるが、僕もいつも三十番台である――下から数えて）

見た目だって、よく見ると可愛い印象で、身長は百四十五後半から百五十前半、体型もやせ型ではあるが、頬にまだ肉付きがあり、眼は大きく、アヒル唇（ここは個人的にヒット）で、髪型も、肩に掛かるかくらいの茶色のセミロングで、毛先に軽くカールが掛かって、全体的に幼い印象が強い。女子の情報に長ける友人に話を聞くと、隠れファンも多く、年上にモテるらしい、告白した人もいるらしいが、見事に撃沈したらしく、他校に彼氏がいるのではないか？というのが友人の予想である。

友人曰く、「人懐っこくないタイプドル」らしい。

そう、何故、彼女をここまで認識し、恋に翻弄するうら若き乙女のように、彼女に対して述べたのか。

あれは、夏も終わりを迎え、そろそろカーディガンだけでは寒さに耐えられなくなってきた秋の中頃、放課後に僕は独りで学校の屋上にいて、カメラ片手に洗朱色の空を写真に納めていると、逆側のドアから人が入ってくる音が聞こえて、振り向くと三石きこが居た。三石きこは僕に気づいてなかったらしく、柵の手前まで歩いていくと、何か紙を破り捨てて空へ放り投げていた。

その時である。

彼女の茶色いセミロングの髪が、まるで生きてるように蠢き見る見るウチにお尻の辺りまで伸びて、色も黒、いや、漆黒色に変わった。

それに対しても驚いたが、なによりも驚いたのはそこじゃなかった。

彼女の頭には、十センチ程の乳白色の突起物が左右に二つ、そうまるで

鬼の角のような……

昔話に出てくるような、地方の伝奇に出てくるような

鬼の子を、僕は認識した。

鬼『子』の眼にナミダを 弐

弐

民話に登場する悪い物

郷土信仰に登場する恐ろしい物

日本に伝わる、頭に角を持ち、紅や藍の肌をした頑強な巨人であり、伝説の生物。

それが鬼だった。

三石きこは鬼なのか？

いやはや、落ちつけ。民話だろ？ おとぎ話だろ？ 鬼なんて存在が、この世に存在する訳がないじゃないか。あれは光の屈折とか、破れた紙が頭に乗ったってオチなんだよ。もしくはあれか？ ななか辺りが三石きこを使って、僕へのドッキリサプライズとか、あの二人たまに話してたじゃないか——本当にたまに。

……OK。認めます。あれは光の屈折でも、三石きこのドジっ子アピールでも、ななかのサプライズでもない、僕は見たのだ、偶然にも、偶発的にも、事故といってもいい。

三石きこには、角が生えていた。

まるで、鬼のような。

二つの角が。

「これは、これは、お兄様」

三石きこの事を考えていると、不意に後ろから、男子諸君は人生に一度は言われてみたい呼称で呼びかけられた——いや、誰かは分かっているんだけどね。

「どうも、お兄様。純情、純粹、純真、純然、純良、純正、純潔、純毛毛布で至純、清純たる純国産の乙女、なかなかです」

「お前、もっと普通に挨拶できないのかよ。しかも純毛毛布ってなんだよ」

「あら、お兄様、純毛毛布とは、羊毛、カシミア、アルパカ、キャメル、ビクーニャなどの獣毛を用いた毛布。の事ですわ」

「いやいや、純毛毛布の意味を聞いたんじゃないから」

「因みに、私的にはアルパカの毛布がお勧めですわ」

「人の話を聞いてよ！ 複雑すぎるよ、お前の会話！」

「そんな『単純』な突っ込みしかできないお兄様が、どうしようもない程に、好きですわ」

なかなかはそう言うと、本当に純粹な、嘘や戯言、不純なんて皆無の混じりっ気のない笑顔に向けた。

む……最初の言葉は聞かない事にして、この笑顔の時は、素直に、本心から話してるんだよな、言葉に詰まってしまう。

「アルパカの次に」

アルパカー！ お前のランク付けはどこなんだー！？ しかも、本心から言ってるんだね！？

仙夕ななか。

同じクラスの女子生徒で幼馴染である。幼馴染といっても、なかは小学三年に引越して高校一年の時に、こっちの戻って来たので、僕としては『幼馴染』というカテゴリーに入らないのだが、当の本人が言うのだから、仕方がない。

高校の入学式の時、全校生徒、特に男子の視線を釘付けにさせたのが彼女であった。

悔しい事に、可愛いのである、しかも、とびきりに。

絶世の美女。

入学当初は「ベスト・オブ・撫子」と言われるほど（この例えもどうかと思うが）の人気だったのだ、いや、今も人気は継続中か。手入れのいきとどいた黒のロングのセンターパート、眼は色気のあるタレ目なのだが、黒眼は大きく、芯の強さを感じさせる。全体から落ちついた雰囲気醸し出し、およそ同級生とは思えない、大人の色気もあるが、どこことなく無垢な少女の可愛さも感じられる。しかも、成績優秀、品行方正、運動もなんでもこなせる、完璧超人なのである。

まさしく大和撫子。

魅力的な、

いや、魅力しかない女性。

それが『仙夕ななか』なのである。

「そんな事より、お兄様、何かお悩みですか？アルパカみたいな顔が、もっと酷い顔になってますわよ」

「お前、僕の顔を、家畜動物と一緒にするなよ」

「ああ！ ごめんなさい……本当にごめんなさい……私は、私はなんて事を……なんて事を言ってしまったの……もう死んでしまいたい」

そう言う、ななかは何度も、何度も、頭を下げた。いや、そこまで反省しなくても。しかも、目に涙浮かべてるし。今にも土下座しそうな勢いで頭下げてるよ。

「い、いや、そこまで謝らなくていいよ。反省してくれたならいいんだ。」

「はい？ これはアルパカに対して謝ってるんですよ？」

「お前とアルパカに何があったんだ！？ 何故そこまでアルパカに固執する！？」

「アルパカの、おまぬけな顔と、威嚇に臭い唾を使用する、という所に惹かれました」

「前者と後者、特にどっちに惹かれたんだ!? お前の好みに興味

津津だよ、僕は！」 「後者です」

「しかも、そっちなー！ 僕のお前に対するイメージが崩壊だよ！
ってかお前に対する説明文が全部台無しだ！」

臭い唾を吹っ掛けられて喜ぶ大和撫子って……

「まあ、ご冗談はこれくらいに致しまして、お兄様、なにかお悩み事ですか？」

「ん？ ああ、ちよつとね」

「日本男児らしくない、曖昧な物言いですね、もっとハッキリと、正々堂々に、お悩みなさってはいかが!?」

「お前は『悩み』という言葉を辞書で調べてこい。……まあ、悩みにって事でもないんだけど」

同じクラスの女子が実は鬼だったんだ、なんて言えない。唐突過ぎるし、飛躍しすぎて、つかというか話題がぶっ飛びすぎて……こいつなら信じそうだけど。

「三石って……三石きこと、お前ってさ、たまに話してるよな？
どんな会話するんだ？」

「あら」

そう言うとな、ななかは怪訝そうな顔した後、「そうでございますか」と言って、厭らしく笑った。

「お前の考えてるような事は、一切ないぞ」

「あら、そうでございますか。お兄様も『恋』をするお年になったと、喜んでましたのに」

「『恋』なんて生まれてから、ずっとしてるさ。してない時の方が、

少ないよ」

「あらあら、お似合いにならない臭い台詞を、ぬけしゃあしゃあと」

「誰だって、そんなもんだって」

その後、ななかは、小さな声で、何か言ったと思ったのだが、聞こえなかった。

「きこさんの事ですね、そうですね……内容的には、本当『普通』ですわよ。明日テストのヤマ予想の教え合い、とか、課題のノート貸して、とか」

まあ、それは予想通り、というか、事前調べ通りか。ななかも、それくらいの会話しかしてないって事か。

「それと、恋愛話とか」

意外な答えだった。いや、この年頃の女子高生からしたら、至極当然なのだが、僕には、三石と、ななか、二人で恋愛話に花を咲かせてる絵面が想像できなかった。

「へえ、どんな内容なんだ？」

「そんな事、殿方の教えられる訳ないでございましょう？」

確かに。しかし、気になるぞ。単純に僕は、知りたかった、ななかと三石の恋愛話を。

「まあ、あれですわ。その会話だって、現代の女子高生が話すような、普通に、当前で、常識的な、故に不変的過ぎる内容ですわ」

情報無しか、まあ予想はしてた事さ。まだ、方法はある。

「そうか、ごめんな、変な事聞いて」

「いえいえ、お兄様が変なのは、今に始まった事でもありませんし」

「後の言葉は、聞かなかったことにする」

そう言って、ななかと別れようとした時、もう一つ聞いておきた
事があったのを、思い出した。

「おい、ななか」

「はあい？」

「お前にとって、三石きこは、『友達』か？」

少しの静寂の後、ななかは、笑顔で言った

「さあ？」

これも予想通りの返答だった

（続く）

鬼『子』の眼にナミダを 参

参

唐突で申し訳ないが、ピンチである。

危機一髪。

危急存亡。

絶対絶命。

今、僕は生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされている。しかし、立ち位置は絶壁ではなく学校の廊下——詳しく言えば、三階にある図書室倉庫の廊下の前だ。しかも最悪な事に、この図書倉庫は三階の端に在り上手い具合に死角になっているのだ。

何故、平凡な成績、立ち位置の公立の高校で殺人事件が起きそうになっているのかを思い返して見る。

ななかとの会話の後、僕は図書室へ向かった。自分の成績向上の為ではなく、静かでクーラーの効いた部屋で惰眠を貪る為でもない。

僕には知識がなかったのだ。

『鬼』という存在、『鬼』というならわし、『鬼』という『鬼』についての知識がなかった。

僕が知ってるのといえば、二月三日（うるう年なら二月四日）の『節分』、秋田の『なまはげ』、御伽草子に出てくる『酒吞童子』、子供遊びの鬼ごっこ、そんなものである。その事だって、ならわしまで詳しく知ってるか、と言われたら正直、言葉を濁す。

先人は言ったものだ、『今の時代は情報戦』と。

まったく以て、その通り。

今の時代は情報が全てだ、相手を知らなきゃ、対処も対策も講じれない。

人間は基本、『知識』を武器にするもの、『力』を武器にするものなんて、今の時代にそうそうはいない、前時代の考えだ。準備を怠らず、どんな事態にも対処するには相手を知る――『臆病』になった、とも言えなくはないが。

そんな訳で、『鬼』に纏わる文献を一人で調べていた、と言う訳。

僕の想像してた以上に『鬼』というのは、日本に密接に関わってるらしい、鬼から由来された地名まであるし、昔の文献の『伊勢物語』とか『源氏物語』にも鬼が出現する。そういえば、小学生の時、国語の授業でも『鬼』を題材にした話があったよな。

日本語にだって『鬼』は進出してるみたいだ、『鬼』のように強いとか『鬼』のような形相』なんて言葉もある、ことわざにだって『鬼』を比喻してる文が数多くある。

素直に驚いた。ここまで日本では『鬼』が常識化されてるものだとは思わなかった、とある地方では『鬼』を神と賜わって祭りを行う、なんてのもある。

だがしかし、ここまで情報が多いと、どれが正しい情報なのか分からない。

いや、今回に関しては『三石きこに対する情報』なのかだ。

無駄な情報は、自分を混乱させるだけだ。

少し目も疲れてきたと思い図書室の時計を見ると、もう十九時を回っていたので今日は帰ろうと図書室から廊下に出た。

その時である。

一瞬、目の前に手のような物が視えた、と感じた時には遅かった。視界は塞がれ、額を左右からペンチで押されてる感覚に襲われた、これはもう『押されてる』というより『圧されてる』という程の痛みだ。

刹那、体が宙に浮くのが分かった。足の裏に感じられないのだ、廊下の感触が、地面の感触が——『立っている』という感覚が。

そして、背中から風を感じた。自転車で坂を勢い良く下る、それくらいの勢いの風を、ベクトルを、背中から感じた——押し出されている。

僅かな、本当に僅かな時間、背中に当たる風に心地よさを感じていると、背中に衝撃が走る、壁なのか、なんなのかは今の僕には分からないが、背中に感じていた、風が、ベクトルが、上下左右、右往左往に散開するのが分かった——残ったのは痛み。それだけだった。

「嫌んなっちゃうねえ」

可愛い声だった——しかし気だるく、やる気のない声でもあった。

「今のキミを例えるならさあ、蛇に睨まれた蛙。って感じい？ああ、眼見えないんだねえ、ゴミンゴミンちょ」

圧迫されてた額が痛みから解放された。

ライトの光に目をしばつかせる。

しかし、少しの安堵感も感じさせず違う痛みを感じた。

首である。

首を締め付けられてる、しかも片手一本で、付け加えるなら左手で。呼吸が乱れる、しかしできないわけではない、それくらいの力加減。

しかし、振り払えない、コイツの腕の力、尋常じゃない！ 異常だ！

「どんもどもお。今の君ってさあ、『危機一髪』、『危急存亡』、

『絶体絶命』って感じかねえ？」

彼女の顔は、笑ってはいなかった、しかし、心で笑ってる、単に言えば、馬鹿にされてる、というのが分かった。

「ああ、そんな睨まないでえねえ？　怖い怖い、蛙さんが蛇を睨んじゃねえ……ダアメエ」

左手に力が入る、空気が、意識が、無理やり持ってかれる。

「今の君の状態は、さっき言ったよねえ？　それが『九死一生』『十死一生』はたまた『万死一生』になるかは、君の行動に掛かってるよお？　おゝけえゝですかねえ？」

彼女は自分の右手で僕の左手を掴んだ、およそ手を繋ぐように優しく。

「肯定の意志ならあ、手をお、二回握ってえねえ？　否定の意志ならあ、なんもしないでえねえ？　まあ、その時はあ、意志が遺志になっちゃってえ、君の体あ、石みたいに動かなくなっちゃうけどねえ」

目の前にいるのは

「因みにい、今の状態はあねえ、『一触即発』って感じかねえ」

鬼のような力行使する少女。

「日本語ってえ、おもしろいねえ」

三石きこが其処にいた。

）
続
く
）

鬼『子』の眼にナミダを 肆

肆

三石きこ。

同じクラスの女子生徒。

鬼の角を持つ少女。

人懐っこくないトイプードル。

ちくしょう。何が『トイプードル』だ！ おもちゃ（トイ）にされてるのは、僕の方じゃないか。こんな小枝みたいな細い腕のどこに、こんな力が備わってるんだ！？ 人体構成完全無視ですよ、筋肉量も骨質もあったもんじゃない！ ——いや、あるんだろうけどさ。

そんな、どうでもいい事を考えていると、彼女は、その可愛いアヒル唇（ここ、やっぱり個人的にヒット）で喋り出した。

「ああ、けど『蛇に睨まれた蛙』は、なんか意味違うねえ、だって今、キコが無理やり動けなくさしてるんだもんねえ、もったいい言葉あるかねえ？」

どうでもいい！ 本当にどうでもいい！！ 今のこの現状に、現文、古文の話しなんかしてられるか、しかも、お前の手が邪魔で喋れない、というか息をするのも、やっとの状態なんだよ。

しかし、それを知ってか、知らずか、三石は僕の首を絞めてる左手を緩めた。

と思ったのは一瞬、さっきの力以上に絞め出した。

今度は息ができない、し、死ぬ。

「にゃっはは。昔ねえ、蛙のお尻にねえ、ストローを刺して空気が

れて遊んだよねえ？　そんな時のねえ、蛙の顔にソックリだねえ。ゲコツて言ってよお。ねえ？　ゲコツて言ってケロオ？」

こーコイツ、悪魔だ。いや、鬼だ。

正しく。

正しく。

正真正銘の鬼だ。

「か、はあ……」

僕は息を漏らす。本当、何処にそんな息が残ってたのか、自分でも分からない。

その漏れた息を聞き、三石は喋り出した、本当に気だるそうに。

「ああ、ごみんねえ、ちょいち力、入れ過ぎちったねえ、まだ慣れてないんだよねえ。」

首への圧迫感が緩んだ、同時に空気が体中に入っていくのが分かった、空気の大切さを、ここまで感じた事は人生で初めてだ。地球温暖化ダメ、ゼツタイ。

それでも首には、三石の左手が残っている、というのは変わりない。絶対絶命っていうのも、変わらない。

さあ、どうする？　僕。

すると、三石は、自分の右手、僕の左手を握っている右手を、そのまま左右に振った。

「んじゃねえ、さつきも言ったようにい、質問ねえ？　同じ事はねえ、言わないよお？　おバカな人はあ、イヤなのねえ。」

お前は『バカボンのパパ』か。『バカボンのパパ』のクセに、『天才バカボン』否定するな、赤塚不二夫さんに謝れ。

そんな『おバカ』な事を考えてると、三石は口を開いた。

「質問その一ねえ、キコのお、正体知ってるのかねえ？」

初っ端から、核心を突く質問だった。僕は正直に、三石の右手を、二回握った。

「マイナス二だねえ」

なにが！？　　ってかポイント制だったの！？　　しかもマイナスって…『正直ものは馬鹿を見る』　　ってオチなのか！？

「質問その二、なのねえ。」

『バカボンのパパ』もとい、三石きこは一瞬の静寂の後、僕の顔に、自分の顔を近付かせた。

それは、カップルがキスをする程の距離。

後、一センチでも顔が動けば、唇が重なる程の距離。

三石の髪の毛の匂いと、その可愛い口から吐き出される息に、僕は少し眩暈を感じる。

「この事、誰かに話した？」

恐怖。

きつと『恐怖』だったのだろう。

今までの気だるい、滑舌の悪い喋り方とは、まったく違う、ハッキリと、一語一語に力を入れた言葉。しかし、色でいうなら、青。内に秘めた噴気を抑えてるような、青の炎。

恐怖を隠すことに僕は必至で、いや、隠し切れてなかった、と思う。返答するのに躊躇していると、三石きこは、先程のように気だるく喋る。

「んー、良い子だねえ。誰にも喋ってないんだねえ、良い子良い子してあげるのねえ」

そう言うと、僕の頬に、自分の頬を当て、上下に擦りつけた。少し唇が当たったかもしれない。

いつもなら、日常なら、こんなシチュエーションに歓喜する所だが、今の僕には、『恐怖』しかない。

素直に、怖い。

「んじゃ、質問その三、なのねえ」

三石はしゃべる。僕の頬に、自分の頬を合わせたまま。

「もしねえ、他の誰かに喋ったらねえ、君の四肢も、五感も、ついでに第六感もグチャグチャにしちゃうのねえ？　生きてるって素晴らしいって思えなくなるねえ」

それは質問ではなかった、警告、忠告、いや、脅迫だった。

「あ、それとねえ。その話を聞いた人もねえ、同じ事ねえ、しちゃうのねえ」

その時、足音が聞こえた。一人、だと思う、誰かがこちらに近づいてくる。三石は、と咄嗟に音のした方を振り向く、足音は一旦止まり、そして、再度、足音。しかし、足音は小さくなっていく。離れていったのだろう。

そして、何も聞こえない。

無音。

三石は少し、安堵したのか、肩の力を緩めた。そして三石は口を開く。

「お話し過ぎたねえ、ああ、君は一回も喋ってないのに、お話を、滑稽だねえ、おバカだねえ、キコって。」

そして、首に纏わりついていて、左手を放し、同じく右手も。

ついでに、密着していた頬も。ここでやっと残念、と思ってしまう自分は、不謹慎なのか、常識的なのか。

「けどねえ、約束はねえ、約束う。破ったら、メエ！　だからねえ」

そして、彼女は踵を返し、去って行く。今まで、僕の首を絞めていた左手で、手を振りながら。

さも、友人との会話を楽しんだ後のように。

また明日会う約束をしてるように。

当然に。

そして、僕は廊下に尻餅を着く、安堵からか、恐怖からか、どちらか分からないが、いや、きつとどちらもだったのだろう、足がいうことをきかなかった。

「ちくしょう、スнгеエ怖いじゃねえかよ。」

そう言った後、ため息を吐く。図書館で食べた、焼きそばパンの臭いが、鼻に突く。

その時である、僕の真横にあった、図書倉庫のドアが、勢い良く開け放たれた。

そして、彼女はいた、てかいつから居たんだ？ この女は。

仙夕ななかが、扉を開けたまま、立っていた。

右手に焼きそばパンを持ちながら。

「やっぱ、学校で食べるパンは、焼きそばパンに限りますわね。ドラマ・漫画・アニメ等々の学園モノには、切っても切っても離れられない存在ですわ」

そう言いながら、舌を出して、もう一口、と焼きそばパンを口に含む。一々仕草がエロいんだよ。

「お前、何時から居たんだよ」

「おひいはまが、みひさんのひよほに」

「口の中の焼きそばパンを飲み込みなさい、お母さんが悲しむぞ」
ななかは、少し顔を顰めて、こちらを睨んだ後、口の中の焼きそばパンを、胃の中に詰め込んだ。

「失礼致しました。私という者が、こんなハシタナイ行為を、殿方に見せるなんて。失態です、恥です、羞恥に値します。責任とって

下さい」

「責任転嫁にも程があるぞ！」

「転嫁、『嫁を転がす』なんて、厭らしい事を……お兄様の趣味——良い趣味ですわ」

「本当に、お前に対する説明を返してくれ」

追加しておく、仙夕ななかは変態である、しかも『ド』がつく程の。

「で、変態さんは何時から居たんだよ？」

「おっぱいはまーひゃ、めそそぺたみあん」

「どこの宇宙人と交信してんだよ！？ 日本語話そうよ！ ってか、さっきパン食べ終わってたよね！？」

「……お兄様が、きこさんと頬を擦り合わせていた所、辺り——」
うわ……そこからかよ、今思い出すとスンゴイ恥ずかしい場面じゃないか……

「より、前の前の、お兄様が一人で、図書室で焼きそばパンを食べながら、本を読み漁ってた、辺りから居ましたわ」

「助けるよ！ 一部始終見てんじゃねえかよ！」

「えっ！？ あれは営みの最中じゃなかったのですか？ 流石の私も、そこに混ざるなんて……イヤン」

「どこを、どう見れば、そんな風に見えるんだよ！ マジで死ぬところだったんだぞ？ 息も切れ切れだ！」

「息も途絶えるほどに、お二方、貪り合ってたのですね、しかし、ここは学校ですよ、お兄様？」

「エロから抜け出せえ！」

こいつとの会話は疲れる……何故かコイツは、僕とは、こんなテンションでしか話さないのだ。こっちが本性なのか、はたまた逆か——

「すごい力でしたわね」

「……ああ」

「およそ、人とは呼べないほどの」

「……………」

「まるで、鬼のような強さ」

何も答えられなかった。

あの力は、どんなトレーニングを重ねた所で、無理な力だ。

プロのアスリートだって、あんなの不可能だ。

ましてや、女子高生なんて、しかも三石フイクンションきの体格なんかじゃ、あんな力なんて無理だ、夢だ、幻想だ、架空だ。

しかし、僕はその『架空』と相まった。

認めなければならぬ。

これは、『現実』だ。

「おい、ななか」

「かしこまりましたわ、お兄様」

「まだ、何も言ってないぞ」

「それも、踏まえて、『かしこまりましたわ、お兄様』」

そう、ななかは、こういう奴だ。

無条件に、僕の助けになってくれる。

だから、僕も、ななかを助ける、無条件で。

三石きこは言っていた。

他の話を聞いた人も、僕と同じようにする。と。
それを聞いたら、もう止められない。

「さあ、鬼救出たいじゅにいくぞ」

「ワン！　ワン！」

……最後の締めくくらはシツカリやれよ………

）
続
く
（

鬼『子』の眼にナミダを 伍

伍

僕と三石のきっかけは屋上だった。

偶然的に、奇跡的に、運命的に、僕は見てしまった。

彼女の秘密を――。

そして、彼女は悪意を以て接した。

では、もう一人の彼女は？

僕とななかのきっかけ。

偶然的に？ 奇跡的に？ 運命的に？

僕は、どのようにして出会ったのか。

仙夕ななかとの出会い、ならわし。

そして、彼女は僕に何を以て接してるのだろう。

誠意か、同情か、それとも――

「虎柄以外、考えたくもありませんわ」

――なにが？

「パンツですわ。いえ、ここは敢えて男性方の煩惱を刺激する為に

……『おパンティ』と言わせて頂きます」

――誰の？

「きこさんに、決まっていますわ。それとも私の『おパンティ』がご希望ですか？」

人生で初めて、同年代の女子をゲンコツで殴った。

「痛いですわ、お兄様。『愛には痛みも必要』なんて、前時代の考えはお止めになさった方が宜しいですよ？」

「俺のシリ阿斯返せよ。ってかなんだよ？ 『考えたくもない』って、お前の個人意思でガッチガチに固めてんじゃないかよ」

「だって、『鬼』ですよ？ 鬼のパンツって云ったら、虎柄に決まってるじゃありませんか？ それ以外を履いてるなんて、夢がありませんわ」

「そんな夢捨てちまえ！」

「夢を捨てたら、人間お終いですわ」

「夢を見る方向を変えろよ！」

「見ていませんわ。私は、夢を与えているのですわ、お兄様」

「誰に！？」

「五歳のおませな男の子から、還暦のお茶目なおじい様まで、それは幅広く。お兄様、夢は年齢を越えますわ」

「無駄にカッコつけんな！ 還暦のおじいちゃんが、お茶目で女子高生のパンツを妄想してるなんて、思ふなよ！」

「なんだその素敵大国は。そうになったら、日本は終わりだ……いや、始まるのか？」

「エロスは年齢も、国境も、性別も越えますわ——ビバ、エロス！」
「開き直ってる！ もう、無駄なカッコ良ささえない！」

何故、こんな会話をしてるのか、いや、何故、こんな会話になったのか、それは僕にも分らない……このエロ犬ハチ公にでも聞いてくれ。

誤解を解かしてもらう、情報交換だ。僕とななかは図書室で『三石きこに関する情報』を教え合っていたのだ。決して、「三石きこのパンツに関する情報」を聞いてた訳ではない、興味ないし……いや、その、本当に。

話を戻す。しかしながら、ななかの知ってる情報も、僕と同じよ

うなものか。どちらかと言ったら、僕の方が知っているくらいだ。初っ端から八方塞がりだな……。

二人で考え込んでいると、ななかが口を開いた。

「まあ、こんなお兄様の包容力並に少ない情報ですけど、分かった、つとといいますか、調べるべき事はいくつか出てきましたわ」

軽く人間を否定された気がしたが、無視させてもらう。

「まずは、『手紙』ですわ。きこさんは、手紙を破り捨てていたのですよね？　それがなんなのか、気になりませんか？」

それは僕も思った。その手紙を破り捨てた途端、三石は『鬼』になったのだ。その内容がキツカケなのか、それとも、破ること自体がキツカケか……

「それに、彼女は、こうも言っていましたわ。『まだ慣れていない』と」

「そんな事、言ったか？」

「ええ。雨露を撫でるように、細く補足をしてました。まあ、あの時のお兄様は、きこさんに捕捉されましたから、覚えてなくても仕方ありませんわね」

確かに……あの状況下だ。すべての言動、行動を寸分なく覚えてるか、と聞かれると言葉を濁す。

「そう、これは『確定情報』です。きこさんは最近、鬼になった——いえ、為り下がったのですわ」

ななかは笑っていた。この状況を、楽しんでいるようだ。僕としては、こんな非現実的な話から、解放されたいのだが。

「……お前、楽しそうだな」

「あら、お兄様。この状況を、楽しまずして、どうしろって言いますの？　私達の年代なら『他人とは違う』とか『特別でありたい』と、願うものではありません？」

「まったく以てないな。僕は『平凡であり単調であり大衆である』事を望むよ」

そう告げると、ななかは「まったく欲がないですね」、と溜息を

吐いた。コイツ、僕のためではなく、自分の私利私欲の為に、自ら首を突っ込んだんじゃないのか？そんな事を考えていると、ななかは、再度話しだした。

「話を戻しましょう——そこからまた、新たな謎が出ますわ。最近、鬼に為り下がった、きこさんは『何処で』、『何時』、『何故』、『どのようなにして』、鬼になったのか、ですわ」

「ビジネス用語じゃないんだからさ」

「あら、お兄様がお好みの合理的な説明をしたのに。それにビジネスなら5W2Hですわよ」

「2H？ 後、一つのHはなんだよ？」

「How Mach」

「ああ、なるほど」

「ふたりエッチ（2H）はHow Mach？」

無視した。

「お兄様はHow Mach？」
擬視した。

こいつのエロに対する原動力は、何処から出てくるのか。話題を戻そうと、僕は口を開く。

「しかし、そんな事は分かってるんだよ。それを解決する為の糸口が見当たらないから、こう頭を抱えてるんだろ？」

ななかは、無視された事は気にしておらず、厭らしい笑みを浮かべて、喋り出す。

「確認は大切です、お兄様。言葉にする事、意思の疎通は必ず行う事ですわ」

そして、ななかは椅子から立ち上がり、背伸びをした後、付け足すように言った。

「『謎』は、読んで字の如く、『言葉の迷い』ですわ。言葉の迷いに、言葉で対処するなんて非合理的でございましょう？ 言葉の迷いには、まず『行動』で向かうべき」

そう告げると、ななかは図書室の扉に向かい——力強く開け放つ。

そして、こちらを向き、こう告げた。

「この、純情、純粹、純真、純然、純良、純正、純潔で至純、清純たる純国産の乙女、仙夕ななかにお任せあれ」

「当てはあるのか？」

「それはもう。古今東西、津津浦浦に」

そして、去って行く。さも次の行動を事前に把握、確定してるように迷いなく。

思うと、今までの会話を純粹な会話として楽しんでいただけのようだった。

さてと——ななかの取ったのは『行動』
それでは僕は？

『言葉の迷い』に対して

『平凡であり単調であり大衆である』僕は——どう対抗する？

（続く）

鬼『子』の眼にナミダを 陸

陸

『言葉』 ってのは面白いものだ。

鬼の少女をリスペクトするなら、

「日本語ってえ、おもしろいねえ」

本当におもしろい。

言葉ってのは心を、感情を、思いを、声帯を振動させて、相手に伝えるものだ。言葉の発達があつてこそ、今の世界がある。

言葉を発する事は思いを伝えること。

しかし、その言語の発達、思いの発達は少し歪んでしまったらしい、それは必然——必然的矛盾と云うべきか。

言葉を発する事は思いを隠すこと。

やはり、言葉ってのは——おもしろいねえ。

朗報である。いや、自慢させていただく。本日は日曜日、天気は快晴、朝から快便。髪を整える時間も、平日の倍はかけている。

要はデートだ。

高校二年の男子、異性に興味を抱き、性に興味を抱き、抱き枕でも買っちゃおうかな？　なんて思ってしまうのも、至極当然。そんな陶然する気持ちを抑えながら、鏡に向かう僕は、素晴らしい程に健全だ。この年頃の男子は、どんな異性とも交友を深めたい、デ

ートをしたい、恋をしたい、なんて考えるものだ。この少子化問題が叫ばれてる昨今、僕等が動かなくなってるんだというんだ。

恋せよ女子！ 愛せよ男子！ 日本でも一夫多妻制を認めるべきだね！ ——ごめんなさい、調子に乗りました。ななかの癖がうつったかな……。

しかしだ、デートの当日だったのに、この憂鬱な感覚はなんだ。前に述べたように万全な日——デート日和なのに、気持ちが高揚しない。無理やり高揚させようとしたが、やはり無理だった。

それもこれも、昨日の電話だ。このデートのキッカケとなる電話——。

昨日、土曜日の夜、夕飯も済ませて部屋で漫画を読んでいると、凶々しい携帯の着信音が聞こえた。溜息を吐きながら携帯の着信ボタンに押すと、開口一番に着信相手はこう告げた。

「デートです、お兄様。バラの花束を持ち、白のタキシードを羽織り、『君の瞳に恋してる』を口ずさみ、手を繋ぎ、スキップしましょう」

電話を切った。着信拒否設定の仕方ってどうだったっけ……。しかし、すぐに再度、同じ着信が鳴る、僕も再度、溜息を吐き電話に出た。

「デートです、お兄様。バラのは——」

「僕は花粉症だ、白のタキシードもない、その曲の年代でもない、さっきトイレ行ったばかりだし、スキップは小学生の頃にできなくて軽くいじめられたからトラウマだ」

電話相手は、この返答を待ってた、と言わんばかりに、すぐに言

葉を返してきた。

「鼻にテッシュ詰めてください。制服のブレザーを白に塗って下さい。曲はそれっぽく口ずさんでおけばバレません。トイレは……むしろ喜んで！　トラウマに関しては、『一緒にトラウマを克服してほしい』という、告白と解釈します」

「お前の愛の深さに、感嘆するよ」

「こんな事、簡単ですわ」

変態とは、『究極愛の伝道師』なのかもしれない……。

変態もとい、仙夕ななかは告げた、デートだ、と。そんな気分じゃないんだよ、三石きこに関してはどうしたんだ？　お前の『行動』の結果は？　この数日間、学校も休んでたクセに——心配したんだぞ……。そんな言葉にするには、恥ずかしい事を、頭に浮かべないと、ななかは見透かしてるように、「心配なさいました？」と言言。

「ぐっ……してないって。」

そう言うと、少しの無言の後、ななかは話し出した。

「ふふっ。そうですか、そういうことにしましょう」

少し、恥ずかしそうだった。

「だ、だから！」

僕の方が、恥ずかしかった。

「ですが、お兄様」

言い訳をしようとしたが、遮るように、ななかは喋り出した。

「人間というのは、脆いものですわ。感情で、気持ちで、思い込みで、一瞬に崩れてしまいます、欠陥だらけです。こんな事で心配なされては困りますわ」

無言になる、その言い方が、突き放すように感じられて、寂しくなる——確かに、脆いものだ。

「だから、ポジティブにいきましょう。気持ちが変わりやすいもの、ならば良い方向に変えればいいのですわ」

さつきとはまったく違う、優しく、包み込むような、聖母マリアのような、愛を感じられる――

「今回の事は、『放置プレイ』と考えてくださいませ」

「マリアー！」

生神女に、傷心させられてしまった。

「――で、何を掴んだんだ？ お前のいう『行動』は」

そう、この数日間音信不通だったのが、連絡してきたということ
は、何かを、『三石きこに関する情報』を掴んだのだろう。

深く言えば――対策を。

「あら、お兄様。楽しい会話はお終いですか？ 人間、時間は有限
ですけど、結構長いものですわよ」

「すまないが、僕の理念は、Time Is Money（時は金
なり）なんだよ」

時間が少ない――とは思わないが、早く不安要素は棄てたい。『
平凡であり、単調であり、大衆である』事を望む僕には――特にね。

その後、なかなかの行動により掴んだ情報を聞いた。

「まあ、話は分かったよ。それで――なんで、デートなんだ？」

「お兄様の顔を、久方ぶりに拝見したいですしね」

それは、有り難い事だ。

「しかしですね、デートのお相手は、私ではございません。残念で
すわね――というか、私が残念無念また来世、ですわ」

相手がななかじゃない？ どういう事だ？ それじゃ誰なんだよ
？

「それは、明日のお楽しみ。ですわ」

そして今日である。

相手の分からないデート——これはデートと呼んでもいいのか？
ななか曰く、「思い深いデートになることでしょうね」と、嘲る
様に話していたが——こんな事じゃ気分も高揚しない。

そんな憂鬱な気分でも、髪を通常の倍の時間をかけて整え、お氣
に入りの服——勝負服と言ってもいい（制服を、白に塗ることはし
なかった）、それに着替えてしまうのは、思春期の性か、男の性か
……。

ななかが指定した場所は、僕の住む家から、少し離れた喫茶店。
この田舎にしては若者向けのスイーツやらドリンクが多く、僕らの
溜まり場にもなっている場所——蛇足だが、いつもいる店員も可愛
いのだ。

親父の原動付自転車で、二十分といったところか。準備も整え、
玄関で靴を履いていると……

「にい、お出かけかえ？」

『にい』って、僕のことね。

妹である——こっちは血の繋がりもある、歴とした妹。名前は、
『ほがらか』という。 中学三年の極々平凡な妹、であってほし
かった妹である。

「ああ、兄ちゃんはデートだ。嫉妬するなよ」

「可哀そうに」

「誰が!？」

我が妹は、当前の事聞かないでよ。と言わんばかり、溜息を吐き
ながら、

「デート相手に決まってるでしょ。これって、どら猫が魚を咥えな
がら走った、時を見た事がないくらい常識だよ」

「お前は、国民を敵に回したな。日曜、七時半のお茶の間にいる国民に謝れ」

「そうやって、火曜日のサザエさんの存在は、抹消されたんだね……人間って怖いね、汚いね」

「お茶の間の空気が、真っ暗だよ！俺は覚えてるよ、心の中にいつまでも！」

「それよりも、にいの心が汚いね」

「そっちの方向に向くのは、なんとなく予想してたが、やっぱり言われると傷つくぞ」

しかし、予想してた事だ、耐性があるから、傷は浅い――。

「見た目も汚い、ってか臭い、ってか酷い、ってか惨い。デートも、にいの妄想でしょ？夢と現実くっちゃくちゃにしないで。妹として恥ずかしいよ。それで私が自殺したら、どうするのかえ？」

玄関で妹の前に、膝を抱えている兄の姿があった――名前とは正反対の妹に育ってしまったな。

憂鬱な気分を更に憂鬱を上塗りしながら靴を履く。このまま、樹海に足を踏み入れそうだ。

すると、我が妹、『ほがらか』が口を開いた。

「で、にい？夕食はどうするのかえ？」

ん――そういえば今日は、母親も、父親も、仕事で夜もいないのか、日曜日なのに、御苦労さまです。

少し考えた後、僕は言った。

「七時半までには帰る。茶の間で待っていやがれ。ワカメちゃん」
「私のパンツ見て、興奮するなよ。カツオくん」

そして、親父の原動付自転車に乗る。

ほがらかとの会話で時間を食ってしまったので、少しスピードを上げて行くか。

ドアを閉じる瞬間、「今日の夕食は、カツオのタタキか」と聞こえたのは気のせい、だと思いたい。

（続く）

鬼『子』の眼にナミダを？

？

願いが一つ叶う……なんて言われたら、僕はきつと、こう言うだろう。

——願いよりも、想いを叶えてください——。

家を出て一時間と二十分、ななかに指定された喫茶店に、僕は居た。

いつもは友人との溜まり場に使っていた場所だが、現在、僕は独りである。

平日は学生服の男女が、他愛もない話に花を咲かせ——。

自愛に積もる話を押し付け——。

友愛を確認する会話に勤しんでいるのだが——本日は日曜日、人も疎らだ。

まあ、確かに立地は良い方ではないよな。学校からもバスでは直ぐだが、徒歩で向かうと時間が掛かるし、自転車に関しては、駐輪場が近くに無い——よく考えたら、ドリンクやフードの種類の豊富さだけで、ここまで来るのはアホらしいな。

因みに、僕はバスで向かう——結構バス代がかさむのだが、友人との付き合いも大切だ。

いや、僕の日常なんかいいんだ。何故、そんな立地も悪く、友人との付き合いでもないのに、ブレンドコーヒーを片手に、ど真ん中

のテーブルで、独りニヒルを演じているかというところ——デートだからだ。

そう、デートである、ウキウキのワクワクさんでボロリのズボンもポロリだ——難点を言えば、デート相手が誰か分からないくらいで……痛手だな。

だがしかし、なかなか指定された時間から、もう五十分は過ぎている。寛容な僕でも少し気が滅入る。

彼女にするなら待ち合わせ二十分前に来ていて、僕が「待った？」なんて言ったら、彼女（妄想）が「べ、別に待ってないわ！」なんて言いながらも、寒さで頬を赤くしてほしいものだ——あ、季節は冬ね。

そんな非現実的な夢を、頭に巡らせていると、喫茶店のドアが開いた。まあ、喫茶店なのだから、人が来るのが当たり前なのだが、入店者は休日なのに制服であった。少し辺りを見回すと、待ち合わせ相手を見つけたのか歩き出す——そう、僕の方へ。

さも当然に、僕の座っているテーブルのイスに座る制服の『彼女』。

「やあやあ、お待たせえましたあ」

身長は百四十五後半から百五十前半。

「しかしあれだねえ、こここの喫茶店を探すのにねえ、時間掛っちゃったのねえ」

幼さを感じる肉付きのある頬。

「けどねえ、家出たのはねえ、結構早かったんだよね？」

真珠のように丸く大きな瞳。

「あれ？ 何時だっけえ？」

僕好みの大きなアヒル唇。

「まあ、いいよねえ。こうやって会えたんだしねえ」

毛先にカールのかかった茶色いセミロングの髪。

「一期一会——てえ、思っただけどねえ」

気だるそうで、やる気のない口調。

「それでえ？ また、首絞められたいのかねえ？」

鬼の子——三石きこが、僕の目の前で、ワザとらしく両手を頬に当てていた。

「馬鹿は治るけどねえ、変態は直らないみたいだねえ」

まあ、予想してた事さ……望んではいなかったが。

数日前、僕は学校で——詳しく言うなら、学校の三階、図書倉庫前の廊下で殺されかけた。この平凡で単調で大衆たる一般高校生男子が何故、学校で殺されかけたのか——キツカケ。

そう、キツカケは前にも説明しているから省略するが、要は『秘密』を見てしまったのだ、偶然にも——無然だと思えば望んだ日々は、ものの見事に崩壊されたのである。

僕は『異常』という被害に遭った、『非常』という暴力を行使させられた。

だがしかし、それは僕の視点からであり、加害者の視点は、違っていたのだろう。

『秘密』という漢字の『密』は『うかんむり』と『やまへん』の中に『心』を置く——つまり、心を隠す、心を遠ざける、心に触れさせない、心を見せない……。そこに『秘』を付け加えると——、

『人（私）には必ず、見せたくない心がある』。

そう考えてしまうのは、僕が、被害妄想の激しい人間だからと願いたい。

休日の喫茶店で、若い男女二人が、同じテーブルの席に着く。傍から見ればデートに見えなくもない。しかし、これはデートなんて甘いモノじゃなかった。

その理由に、テーブルの下――僕の卸し立ての白のスニーカーに、三石きこは、茶色い学校指定のローファーを置いた後、囁いた。

「動いたらあ、君の足をねえ、アリンコみたいに潰してねえ、無理やり動けなくさせるからあ。その後はあ……聞かない方がいいねえ」こ、怖えー。

腕、もっというなら指で、あの力だ。足の力なんて、常人でも腕の倍以上の力、それが三石きこの――鬼の力なら……潰される、というか、本気で無くなるな。

しかし、僕は冷静だった。

「落ちつけ、三石。僕はお前を脅しに来たり、強請ったり、ましてや、服従させるために来たんじゃない。お前の足を潰すなんて脅しは、まったく無意味だ」

「そんじゃねえ、男の子の大切な部分を潰すね」

「格好付けて御免なさい。一応、主人公なので、こういう場面で格好付けたくなりました。足がいいです、足を踏みつけてください。」

このド腐れ野郎の足を、三石様の美しい足で踏んでくださいませ。」

そう、僕は冷静だった――過去形だ。

「にやつはは。君ってえ、やつぱおもしろいねえ。けど、浅はかだねえ、てか滑稽？ 鶏さんうこっけいもビックリだねえ」

『滑稽』で『鳥骨鶏』て事か？ なんて振りだ。

「楽しんでいただけて光栄だよ――けどさ、こんな公共の場所で、一高校生男子の足が潰された、って事件が起きたら、お前も困るんじゃないのか？」

この田舎町だ、話はすぐに広まる。

三石は少し顔を顰めながら、僕を睨みつける――そして、いつもの惚けて、やる気のない顔に戻る

「そうだねえ、それは困るねえ。浅はかだったねえ、おバカだねえ。キコは」

そう言うのと、自分の足を僕の足から離し、床に置いた。

「それじゃねえ、なんでキコを呼んだんだのかねえ？ 秘密を守ればねえ、無視してればねえ、害は与えないのにさあ？」

そうなんだろうな。無視してれば、秘密を守れば、お前は『何』もしてこない――その『何』かを強制できる力を持っているのに。だから、僕は来たのだ。会話をしに、対話をしに――鬼救出に。僕は対話を試みる。

「その力、いつから持ち始めたんだ？」

三石は眉を顰め、無言になる。そして腕を組み、如何にも不機嫌である、とアピールしているようだ。しかし、そんなアピールは無視だ。

恋のアピールなら、地べた這いずり回ってでも掻き集めるが。

「もっと詳しく言うなら、何時、何処で、どのようにして、何故……そして、その代償はなんなのか。だ」

5W2H。ビジネス用語――しかし、これは利益なんて皆無の対話だ。

三石は、無言のまま、僕を睨みつけている。冷や汗が出てくるね――しかし、僕は話を続ける。

「――お前ってさ、地元はこっちじゃないんだよな。高校一年の時に引っ越してきたらしいじゃないか」

三石の眼が、瞳孔が開いた。やはり、ここか――ここが三石の秘密か。

「それにだ。高校一年の時に、こっちに引っ越して来た前に、お前はもう一度引っ越してる――ああ『もう一度引っ越してる』は日本語がオカシイな、だってそっちが最初の引っ越しなんだから」

三石の制服にシワできる、組んでる腕の力が強まってるようだ。

「まあ、その『最初の引越しをする前の場所』——出身地は、僕にはあまり関係ない事なんだ。僕は自分に降り掛かる火の粉……お前が『鬼になった場所』。そこにしか興味がないから、安心してくれよ」

ここで、やっと三石は口を開く。弱々しく、憎々しく。

「……人権侵害だ。」

「人権？ 最初に侵害させたのは、お前の方だろ？ 平凡であり単調であり大衆である一般高校生男子たる僕を侵害させた——自業自得だ」

言葉は返って来ない。しかし、睨まれる視線の強さは一層増した。「話を戻すぞ……そう、『鬼になった場所』だ。これは一回目の引越した場所、土地、地域で正解だろ？」

三石は、僕の質問に、体を強張らせる——言葉は返ってこない。

「日本の地名ってさ、昔の物語、伝奇、おとぎ話から名づけられた場所もあるんだよ。流石、言霊の国って感じだな」

そう、同じ読み方でも、全く違う字、全く逆のベクトルの意味を持つ言葉、それが『日本語』だ。

「それでだ。鬼が深く関わる土地もあるって訳。例えば、京都府大江町にある大江山、これは有名だよな？ 酒吞童子が住んでた、とされている場所だ。他にも、鳥取県伯耆町の鬼住山、笹菰山。大分県中津市。そして……東北にある、岩手県とか」

その時、今まで鬼のような形相で睨んでいた三石の顔が、恐怖に飲み込まれるのを感じた——やはり、此処か。

「——昔々、その土地に、悪さばかりする鬼がいたそうだ。鬼の悪行、苦行に頭を悩ませた住民たちは祈りを捧げたんだ、岩に。それが『三ツ石さま』、『三ツ石の神』って言われてた大岩だ——ここはあれだ、『八百万の神』なんだろうな。日本って何でもかんでも神格化させてたらしいぞ？ 良い事なのか、悪い事なのか」

三石——三ツ石。言霊の国……か。

「そして、祈りは叶い、鬼は罰せられた。その時、大岩の神様は、

鬼に対して制約を、確約を強要したんだ——この土地には、もう近付くな。ってさ」

「だ、だから……なにさ……?」

弱々しかった。いや、弱かったのだろう。僕は無視する形で話を続ける。

「そんな話しかから、岩手って名前になったらしいんだ、この地域は。因みに、この岩は今も『三ツ石神社』という場所に残ってるらしいんだよ」

無言——いや、諦め。

「その確約の時に、三ツ石様は、その証拠に、大岩に鬼の手形を残させたそうさ。今でいう印鑑とかだな、契約の際の印鑑。まったく、神様も抜け目ないよな——それを踏まえて、三ツ石こ」

三ツ石の鬼——三石鬼——三石きこ。

「お前は、その石に何を祈った? その石に、どんな意思を重ねた? お前の、その力は、その手は……鬼の手と重ねたから、そんな風になっちゃったんだろ?」

（続く）

鬼『子』の眼にナミダを 捌

捌

三石きこは日本人だった。

黄色の皮膚も、小さな身長も、黒い髪も、肉付きのある手も——なにもかも全てが彼女が『日本人』であると、証明していた。

父親も母親も、周囲を海に囲まれた島国たる日本で生まれ、日本で育った。きつと、祖父も祖母もそうだったのだろう。

しかし、三石きこは純粋な日本人でありながら、生まれた場所は違かった——彼女は日本で生まれる事はなかった。

三石の父親は外資系の職に就いて、海外に出張する事も多かったらしい。

それは三石の母親からしたら、仕事に勤しむ父の——彼の背中には誇らしい事でもあり、一人、彼の帰りを待つ事は寂しい事だったのだと思う。

それは、父親もきつと同じ考えだったはずだ。

愛する人とは、いつまでも、どこまでも、一緒に居たいはずだから。

だからこそ、そんな二人が日本を飛び出す事は至極当然の事で、幸せな事だったはずだ。

そんな日本を離れた二人にも子供ができた。

幸せが幸せを呼び、幸せの形を——子供を形成させたのである。それが三石きこの誕生だ。

しかし、その幸せは続かなかった。

いや、続いでいるのだ。

三石の親の幸せは続いている、しかし、
子供は——三石きこは、そうではなかったらしい。

簡潔に言えば、『イジメ』だ。

人種差別なんて、たいそれた物言いは控えるべきだが、まだ常識を知らない小さな子供の中に一人だけ、違う皮膚の色、瞳の色、髪の色、人種が居れば興味を示さない訳がない。

子供の行う事だ、『イジメ』と言っても『虐め』まではいかない程度の、大人からしたら鼻で笑ってしまうような『イジメ』だったのだと思う

しかし、その『イジメ』を受けるのも子供だ、前にも述べたように常識を知らない小さな子供だ。

僕は、運がいいというかなんとか、この人生で『イジメ』に遭った時はないから（弄られる事は多々あるが）、これは推測であり、憶測ではあるが、そんな常識を、世界を知らない子供が受ける『イジメ』は、きっと本人——三石きこからしたら無残な『虐め』だったのだろう。

しかし、三石きこは弱音を吐かなかった。

泣く事も一度もしなかった。

親に相談する事もしなかったのだ——それは前に述べたような『幸せな親の生活を崩したくない』という考えから打ち明けなかったのだと思う。

三石きこは強く、賢い子供だった。

そして何より——臆病な子供だった。

そんな中でも幸せな事、安心できる場所があった。

その場所はやはり家だった。

母親と父親の居る家に帰ると安心できて、幸福になれたのだ。

小さな頃は、三石きこは日本語が喋れなかったらしい。それは当然だろう、だってソコは、三石きこがいた世界は、日本ではないのだから。

だから母親が、たどたどしい英語で話してるのを見て、「お母さんの話してる事が分からない」と言って母親を困らせてたらしい。

しかし、そんなたどたどしい英語を話す母が語る日本の話が好きだった、日本のおとぎ話が好きだった。

三石きこの母親が、何故、日本の話を、日本のおとぎ話を聞かせていたのか。その本心は僕には分からないが、きっと自分の生まれ育った国を、日本を知ってほしかったのだ、と思う。

もしくは、日本が恋しかったのかもしれない。

そして三石きこが十二歳の時、日本でいうなら小学校の卒業の間際、父親の仕事の都合で日本に戻る事になったのだ。

それは三石きこ本人にしたら、歓喜する事だったはずだ。

だって母親が語っていた話、物語だけの世界に、自分が足を踏み入れる事ができるのだから。なによりもコチラの世界から、生活から抜けだせるのだから。

小学卒業と同時に、日本へと飛び立った三石きこ——親からしたら戻ってきた、になるのだが——まず、家族三人は、日本に降り立ったのだ。

日本の岩手県に。

岩手県——日本の東北地方の北部（北東北）に所在し、北は青森県、西は秋田県、南は宮城県と境界を接している県で、土地面積は15,378平方キロ。日本の都道府県としては、北海道に次いで二番目に広い。県の人口およそ百四十万人。

因みに、東京の土地面積は2・187・58平方キロ、人口はおよそ千三百万人。

そんな雄大な土地で生活する事となった三石きこ。それはどうしようもない程、嬉しい事だったのだろう。

その広い大地も、街も、空気も、そして人も。今まで三石きこが見た事のない世界が広がっていたのだから。

母親の話でしか聞いた時のない、もしくは写真でしか見た時のない世界——その世界が今、目の前に広がっているのだ。新しい土地での生活の不安よりも、期待と希望に胸を膨らませていたはずだ。なによりも、同じ皮膚の色、瞳、髪も人種——日本人がいる事に安堵したはずだ。

しかし、現実には、そう甘くなかった——言葉である。

三石きこは日本語が喋れなかったのだ。

中学一年になる頃だ。世界共通言語——つまり英語は話せても、この小さな島国の言語、日本語を授業に取り入れる学校は、そうそうに在る筈もなく、三石きこの通っていた学校も、その中の一つだった。

そして、中学の入学式、彼女はカタコトの日本語で自己紹介をしたらしい。それは中学校に入学したての子供にとっては、珍しかったのだろう、僕だって興味を抱く。

カタコトの日本語を話す少女の噂は学校中に広まり、そして、彼女が海外から来た事も、すぐにバレてしまった——これに関しては、日本独特なのかも……、日本人って噂とか好きだし。

前にも述べた通り、みんなが興味を抱いた。しかし、その興味を、当の本人に示さなかったのだ——区別されたのである、三石きこは。

イジメからは脱却できたが、今度は区別——無視されたのだ。三

石きこは、大衆に紛れる事が出来なかった。まるで『みにくいアヒルの子』だな……。

しかし、『みにくいアヒルの子』ように、逃げ出す事なんて出来る訳もない、だって三石きこは、強く、賢く、なにより臆病な子だったから。自分の所為で、親に心配をかけさせたくない、と思ったのだろう。

夢にまで見た世界、自分のいるはずだった世界からも、彼女は見捨てられたのだ。それは、きつと前にいた世界に抱いていた怒りよりも、もっと深く、もっと暗い、寂しさ、切なさ、虚しさ——そんな感情が彼女を蝕んだはずだ。

この時、彼女が自分の強さを確認し、賢さを認識、臆病である事を認めていれば、少しは、いや、きつと彼女の世界は変わっていたのだと思う。

親に相談するなり、自分から積極的に生徒の輪に向かうなり——なんだって良い、『行動』を起こせば彼女の、三石きこの世界は、まったく逆の世界に変わっていた筈だった。

しかし——出来なかった。そんな簡単で、当然な考えさえも、考え付かなかった程に、三石きこは世界に、現実に絶望していたのだから。

そんな感情では、友達なんてできる訳もなく、毎日一人で朝の学校までの道を歩き、一人で昼食を摂り、一人寂しく家路につく彼女。

平凡というには、無駄に息苦しい平凡を手にし、あってはならない単調の日々を送り、大衆に紛れる事が出来ない孤独感に苛まれる——そんな日々を送った三石きこ。

自殺——そんな事も考えたのかもしれない、しかし、しなかった——出来なかった、という方が正しいかな。だって彼女は強く、賢く、臆病だったから——そこは、感謝する事なのかもしれない。

そんな生活が一年続き、三石きこが中学二年生のなった春。

この生活にも慣れを感じ始めた頃、小さな事件が起きる。

クラス変えである。

その時にも、三石きこの日本語はカタコトのままだった——彼女は諦め、いや、拒否したのだ。

日本語を学ぶ事を。

他人と会話する努力を。

そんなカタコトのままの日本語で、また新しいクラスメイトの前で自己紹介をする——入学式と同じような視線を浴びせられる、と思ったのだろう。

トラウマ。

それがどうしようもなく嫌で、苦しくて、彼女は学校をサボった。

行く当てもない彼女は、どこかの道やら、コンビニやらで時間を潰したのだろう。携帯には学校から、親から電話が掛かってきてはいたが、無視していた——よく考えれば、初めての反抗の意思だったのかもしれない。

そんな行く当てもなく、途方に暮れながら、何処かさえも、分からない道を歩き、とある廃墟に到着した。

潰れた病院、若者の心霊スポットにもなっている場所だ。

そこで彼女は出会ったのだ。

偶然にしては無理やり過ぎて、

運命にしては曖昧過ぎて、

彼女も戸惑ったのだろう。

けど、それはとても居心地の良い空間だ、と彼女は感じていた。

「たたらあ……たたらあ……」

三石きこは何度も呼んでいた。

喫茶店のテーブルに肘を突き、頭を抱えるようにしながら。
細く、脆く、弱く——彼の名前を。

その廃病院で出会った、彼の名前を。

言果たたら（ことはで たたら）。

その名前を、何度も、何度も——。

（続く）

鬼『子』の眼にナミダを 玖

玖

ねえやさしい恋人よ 私の惨めな運命をさすっておくれ

b y 萩原朔太郎

「彼はね……どうしようもない奴だったの」

彼——言果たたら、という人物の名前を、何度も呟いた後、彼女——三石きこは、いつもの惚けて、やる気のない口調とは違う、滑舌の悪い喋り方とも違う——弱々しく思い出すように、儚く思い返すように、言葉を選ぶように、一語一語を大切にするように、そう言った——どうしようもない奴、と。

きつと、今から話す事は、僕の知っている事なのだろう。なかなかから聞いた『三石きこに関する情報』の中に入っている情報なのだろう。しかし、いや、だからこそ——。

だからこそ僕は、ただ黙って、『鬼』になった少女の物語を——。

だからこそ僕は、耳を傾けて、『鬼』になる事は望んだ少女の物語を——。

三石きこの、発する言葉で、語る言葉で、聞きたいと願い、ただ黙って、耳を傾ける。

「そうだね——こんな、どうしようもないキコが言うんだもん。本当に、どうしようもない程に、どうしようもない奴だったの——たたらってさ。だって名前から変でしょ？ 『たたら』だよ？ 『た

たら』って何さ？　って感じだよ。知ってる？　『たたら』と読んで『鑪』って漢字があつてさ、意味が、『砂鉄を、木炭を焚いた土炉で精錬する古式製鉄施設』だってさ。笑っちゃうよね、どうツッコメば良いのか分からないよ。そんな施設知らないしってツッコメば良いのかな。　たたらって何なのさ！　——にやはは……たたらって何だったんだのさ………」

ただ黙って、耳を傾ける僕。

「……君が言ったように、たたらとは病院で出会ったの。あつ、病院っていつでも、もう経営していない病院——廃病院で、ね。キコって身体は丈夫だし、病院なんて、ほとんど行った時ないんだよ、スゴイでしょ？　——違うね、たたらは事だね、たたらは事だもんね……にやはは。直ぐに、他の話に飛んじやうなんて、やっぱキコは馬鹿だね。笑っちゃっていいんだよ？　にやはははは……本当に馬鹿なんだよね」

ただ黙って、耳を傾ける僕。

「えっと——それでね、その廃病院で、たたらに会ったの。『会った』っていうか『遭った』って言った方がイイかな。だって廃病院だよ？　最初、キコは「うわ、幽霊だ」って本気で思ったもん。その廃病院って、結構有名な心霊スポットなのは聞いてたからさ、そんな中で、肌が真っ白で、髪も目が隠れるくらい伸びてて、目を虚ろにして、ボーっとバック持ちながら、突っ立ってるんだもん。そりゃ幽霊だと思うよね——思っちゃったもん」

ただ黙って、耳を傾ける僕。

「それでね——何分くらいかな？　多分、三分くらい、たたらは事

眺めてたら、たたらが、やっとこっちに気づいたの。それで開口一番に何て言ったと思う？ 「君は日本人？」 って言ったの。本当ビツクリしちゃったよ、キコって見た目は日本人で……あつ、DNA的にって言うのかな？ まず日本人のキコに向かつて、「君は日本人？」 って失礼しちゃうよ、今、思い返しても失礼な発言だよ——けど半分は当たってたんだけどね。」

ただ黙って、耳を傾ける僕。

「ムカツとしたから、言ってやったの、「君は人間？」 って。すごいカタコトの日本語で言ってやったの——そしたら、たたらは「失礼な事言うな。足が見える？ 視力は大丈夫？」 って言い返したの——普通に言い返してきてくれたの……。ムカツとしたけど、それ以上に、普通に言い返してくれた事、会話が——日本語の会話ができた事が嬉しくて、戸惑って、けどやっぱり嬉しくて……泣きたくなるくらい嬉しくて。だからまた言い返してやったの、すごいカタコトの日本語で。たたらは、悩むことなく、その文句に対して、また言い返してきてくれて、それで、また、キコが言い返して、それに対して、また、たたらが言い返して……ずっと文句を言い合ってたよ、最後は、何を言えば良いのか分からなくて、意味の分からない事、言ってた気がする。今思い返すと、本当滑稽な、お馬鹿な会話だったのね」

ただ黙って、耳を傾ける僕。

「唇もカピカピに乾くくらい、口論っていうか罵倒し合って、もう、のどもカラカラになっちゃって、それでも何か言いたくて、少し考えていたら、たたらが、自分の持ってたバックの中から、お茶のペットボトル取り出して、一口飲んだの。なんか分からないけど、それを見て「ああ、もうお終いなのかな」 って「もう話しも終わりか

な」って思っちゃって……スngoイ寂しくなったの。その時のキコって、日本語、ほとんど勉強してなかったから、言葉が思い付かなくてね。それが、スngoイ寂しくて、スngoイ悔しくて、スngoイ辛くて——ああ、何か喋らなきゃ。って焦って、戸惑って、けど何も言葉が出なくて、頭の中の、日本語、掻き集めても出てこなくて何もなくて——泣きそうになったの。けどね……けどね？ たたらはね、笑いながら待っててくれたの。ずっと、ずっと待っててくれたの。——キコの聞くに堪えない日本語を、キコの言葉を待っててくれたの。」

ただ黙って、耳を傾ける僕。

「だから、キコ言ったの。「キコの言葉が分かりますか？」って。そしたら——たたら「うん」って、一言だけ言ったの——。キコ、それ聞いて泣いちゃったよ。顔が涙でグチャグチャになりながら、嗚咽混じりで「キコの言ってる事分かりますか？」って聞いたたら、たたらは、また「うん」って言うてくれたの。「キコが泣いてるの分かりますか？」——「うん」。「キコの声聞こえますか？」——「うん」。「キコはココにいますか？」——「うん」。「キコはココに居て良いですか？」——「うん」。「キコの友達になってくれますか？」——「うん」。って言うてくれたの。一言だけなのに……：たった一言だけなのに……：それがスngoイ嬉しくて、最後は大声上げながら泣いちゃったよ」

ただ黙って、耳を傾ける僕。

「ずっと泣いて、鼻も真っ赤になって、声も上げ過ぎてガラガラになって、やっと泣きやんだの。長い時間、泣いてたのに、たたらは、ずっと笑顔のまま、いてくれてたな。泣きやんだら、たたら、そつと飲みかけのお茶出してくれて、キコは、それを飲んだの。そして

ら、たたら、なんて言ったと思う？」「うわ、間接キスしてやんの」だって。その時は意味が分からなくて、キョトンとしてたけど——今、思えば、一発引っ叩いとけば良かったよ。——その後は、二人で帰ったよ、「夜道は危険だから」って言って家の前まで送ってくれて——キコが「ありがとう」って言ったら「うん」って、また言ってくれたな、たたら。まあ、その後は、ママとパパから、スngoイ説教受けて、今日何してたか問い詰められたから、言ってやったの、「友達ができた」って。パパもママも、キョトンとしてたな」

ただ黙って、耳を傾ける僕。

「その日から、キコ、スngoイ日本語を勉強したんだよ。事典とか、家に沢山あるんだよ？　日本作者の小説読んだり、漫画読んだり、ファッション雑誌も——間違ってエッチイ小説も読んじゃった時もあったな……全部見たけど。日本語に触れて、日本語と接して、それをたたらに聞かせたくて、たたらと話したくて、スngoイ勉強したよ。そのお陰なのかな、学校にも行く事も、嫌じゃなくなってる。自分から他の人に話しかけて——たたら以外の友達もできたの。ああ、私、こんな簡単な事が出来なかったのか、馬鹿だな。って笑っちゃったよ。」

ただ黙って、耳を傾ける僕。

「その合間も、何回も、たたらに逢う為に、その廃病院に行ったの。そしたら、たたら絶対居てくれて、キコが来たら、いつもの笑顔で、「おはよう、こんにちわ、こんばんわ、だね。きこ」って言って、くだらない話ばかりしてたの。一番盛り上がったのは日本のおとぎ話の話かな、たたらそういう昔の物語が好きだった、「僕は過去よりも、昔を見たいんだ」って訳の分からない事、いつも言ってたもん。他にも、二人で街や、森や、それに心霊スポット——そう、た

たらは心霊スポットが好きだったの。二人で近くの心霊スポット回ったなあ、多分知らないと思うけど『四十四田ダム』とか『黒森山』とか、ちょっと離れた場所なら『慰霊の森』とか、私の自転車で二人乗りで行ったの——今、考えればデート……なんだよね、これ？本当にロマンの欠片もないよね——楽しかったなあ」

ただ黙って、耳を傾ける僕。

「けどね」

僕は——。

「そんな、幸せな日々は、幸福は、続くわけはなかったんだよ。当り前のことだったんだよ、当たり前すぎて忘れてたんだね……やっぱキコ、馬鹿なんだよ………」

僕は、耳を塞ぎたくなった。

く 続く く

鬼『子』の眼にナミダを 拾

拾

廃病院——読んで字の如く、廃れた病院。又は、壊れかけの施設、終わりがけの場所。『形は有っても象が無い領域』とでも言えはいのか。

そんな、危なく臃げな場所で、彼女——三石きこは、彼——言果たたらと出会って……出遭って……出逢った。

その邂逅は三石きこの世界を光彩陸離の如く、輝きを、言葉を、友達を創った——いや、輝きも、言葉も、友達も、その他の『何か』も創った、というべきだろう。

しかし、僕には分かっていることだが、三石きこの物語は、それだけでは終わらなかった。他人様の人生に終わりを付ける事自体おこがましい事だが、まずハッピーエンドではなかったのだ。

しかし、有難い事に、はた迷惑な事に、僕は三石きこの物語の語り部を担っているのです、その役割は真っ当しなければならぬ。僕なりの、僕らしい『言葉』でいうなら——

——普通の悲劇、王道たる王道な悲劇、悲劇の中の悲劇、至極当然の悲劇、ありきたりでありきたり過ぎる悲劇——

つまり、そういう事だ。

今まで三石が語ったのが、きっと起承転結でいう『起』なのだろう。

少しの沈黙の後、三石は僕のブレンドコーヒーを手に取り、一気に飲み干した——ある種の鬼の一口だな。ついでに間接キスを期待

したのだが上手い事、僕が口を付けた所を回避していたのは言うまでもない……いざやられると結構へこむもんだね、これ。

「地震が起きたの。ニュースとかになったんだけど……覚えてる？」

空のコーヒークップを両手で所在なく触りながら、三石は言った。

「ん？ ……まあ騒がれてたもんな。」

正直、僕は忘れてた。その時——つまり約三年前には全国区のニュースで大きく騒がれて「ああ、大変なこと起きてるんだな」と思った……と思う。だからなかなかの話を聞くまでは、その地震のことなんか忘れていた——その時、何人か死者も出た、とも騒がれてたらしい。

「そうなのね。キコも、あの地震を体験してるの。スングかったんだよ？ 本当に立ってられなかったんだから。その時はキコ、学校にいたから、大丈夫だったけど——あれだよ、それまでは、何で避難場所が学校指定されるのか、分からなかったけど実感したよ」

「あれだろ？ 面積も広いし、粗方の防災器具も備わってるし、何より学校自体の造りっていうのか？ 構造が崩れにくく造られてるらしいじゃないか」

まあ、これも聞いた話なので信ぴょう性は高くはないが、なんか理由的にはそれっぽいので鵜呑みにしている——丸呑みという方が正しいのか？

三石は僕の話の聞くと、目を丸くして、その可愛いアヒル唇を横に伸ばし口を開く——先程の間接キス未遂が悔いを残す……いや、本当に。

「あやや、知ってたんだね。君って結構博学なんだね。」

「あ、いや、これは友達から聞いた話だから、僕の知識ではないんだよ」

「うん、なんとなく分かってたよ」

……ああ、さいですか。

「それなら博学っていうか薄学って感じだね。学が薄いし、人としても薄いつていうか」

「まさか、存在まで否定されるとは思わなかったよ」

「ああ、ごめん。言い過ぎたね。えっと、なんていうのかな……」

少し考えた後、三石は口を開く——いや、そこは考えてまでフォローする場所じゃないから。

「頭が薄いつて言った方がいいね」

「しかも、そのチョイスかよ！ フォローにもなってないし、なんか存在否定されるよりも心に響くよ！？」

響くというより、抜かれた感じだ。

「にやはは。そんな怒ると、本当に頭に悪いよ？ んにや、頭が悪いよ、かな……元氣だして薄井さん！」

「僕は『薄井』って名字じゃねえ！」

「さっぱり！ 薄井大先生！！」

「某長寿番組みたいにしたって嬉しかねえ！」

しかも『薄井』って名字は頭も薄いつて、なんて偏見だ。きつと薄井さんにだって長髪な薄井さんはいるよ、全国の薄井さんに謝れ。

「にやはははは、やっぱ君はおもしろいね。」

お前の方が面白いよ。まったくシリアスマードが台無しだ……。

「きつと、たたらがいてくれたら、こんなお馬鹿な話してたんだろうねえ」

そう呟く様は、以前の鬼の力を行使した少女には見えなかった。年相応の少女——見たまんまの人間。

僕が次の言葉を考えていると、三石から口を開いた。

「えっと——それで、キコの昔住んでた家も、避難場所が学校に指定されてたから、お母さんにも会えたの。お父さんは出張で日本にいなかったから大丈夫だったんだけど」

「親子三人、無事だったんだな、良かったじゃないか。」

「良くなんかないよ!」

叫び——いや、嘆きというべきか。今いる場所が喫茶店という事も忘れて、三石は嘆いた。悲痛を込めるように、悲観を押し付ける様に、悲壮を曝け出すように、痛々しく嘆いた。

「良くなんかなかったよ! だって、だ……ってえ、たたらが……たた、らあ………」

「お、落ち着いて、三石。えっと……とにかく落ち着いて!」

「五月蠅い! 君が、きみ……き、きみがあ………ダ、メ……ダメだっ、ダメなん……ダメだったんだよ! 痛っ……痛いのか……い、たい……っ!」

「……………」

何も言えなかった。自分の言葉の少なさに、虫唾が走る。三石は、こんな感覚に苛まれていたのか……しかも何年も。

それは最早、地獄だ。

「た、たらあ………なんで………なんでなの? キコを……独りに、しないであ? なん……で、其処にい、い……るのか? ダメなのにい!」

錯乱。その言葉が最も相応しい状態だ——ど、どうする。下手に力で押しつけても、三石の力には敵わない、言葉も通じない、店員も何事かとこちらを見ている。ああ、どうしよ、どうしよ………僕が錯乱状態だった——右往左往と頭を回転させても、良い案も、はたまた妙案さえも浮かぶ訳もない。こうなりゃ、白馬の王子様宜しく、キスでもしたら目覚めるんじゃないか。と思い（この案は妙案以下の愚案だ）、三石の顔見ると。

「な……っ!?!」

三石の髪が勝手に動きだしている。一瞬、頭を振っているからと思ったが違った。一本一本の髪の毛が、まるで蛇のように蠢いて

いた。

これはヤバい。こんな場所で鬼なんかになったら、噂どころじゃない。いや、そんな事より、今の三石の状態だ。こんな場所で自分の秘密を——鬼ということがバレたら、何を仕出かすか分からない。

僕がどんな内容でもいいから、落ち着かせようと口を開こうとした時、三石の頭の上から手が出てきた。いや、詳しく言えば三石の後方の頭部辺りだ。その手は僕に向けて一回ピースをする——

三石の髪を掴み、そのまま三石の顔面をテーブルに叩きつけた——いや、こんな説明では、今の現状の『凄味』を感じれない。

鬼の髪を鷲掴みにして、その鷲掴みにした手を大きく後ろに引き、勢い良く、勢いに任せて、勢いなんて無視して、鬼の顔面をテーブルで、ぶち叩き割った。

流石の鬼——三石きこも、気絶していた。うわ……同世代の女の子が鼻血出してる所、初めてみた。ってかこれ悪けりゃ死んでるんじゃない？ いや、良くても死んでるんじゃない！？ テーブルだって……これ多分、鉄だよな。ものの見事にへこんでるぞ。まあ、そのお陰で三石の錯乱も止まった訳だが……

「……訳だが、この惨状をどう店員に説明するんだ？」

「浮気を感じていた幼気な美女が、その浮気相手と彼氏に対して力でねじ伏せた。と言えば、納得して頂けますわ」

「その説明にはツツコミ所が四つある。まず——幼気な美女は力でねじ伏せる事はしない。次に、浮気相手と彼氏という事は、今からその彼氏も同じ事をされるのか。なにより、そんな説明だと僕はこの喫茶店に二度と足を踏み入れれないぞ。最後に、自分の事を美女とかいうな、人気がるぞ」

そこには、悔しい事に美女が立っていた。

右手は三石の髪を鷲掴みにしたままの状態、左手を腰に当て、満面の笑みで僕を見つめている。

威風堂々——その言葉が似合ってる、というよりその言葉そのもの。という程の様。しかし、これじゃ桃太郎っていうより、只の殺し屋みたいだな……。

名前を言ってなかった——ていうか、もう分かってるよね？

「お兄様、こういう言葉があるのご存じでございますか？ 『正直の頭に神宿る』」

「今から店員に嘘の理由を言おうとしてる奴に言われたくないな」

頭に髪も神も宿ってる人間——仙夕ななかが其処にいた。

いや、だから何時からいたんだよ。

（続く）

鬼『子』の眼にナミダを 拾巻

拾巻

『ほどほどに愛しなさい。長続きする恋はそういう恋だよ』

これは知る人ぞ知るシェークスピアの格言なのだが、この格言を初めて聞いた時、いささか疑問を覚えた——性格に云うなら異論を唱えたいと思った。

しかし、残念な事に当の本人は、もう亡くなられてるので唱える事は叶わない。さして故人の、ましてや古人の有り難いお言葉を、齢十七のヒヨツ子が、人生のなんたるかを毛ほどに知らない若輩者が、異見するなんて控えるべきだが……

言わずもがな僕は『人間』だ。

平凡でありながらも『人間』だ。

単調でありながらも『人間』だ。

大衆でありながらも『人間』だ。

十七年という短い人生ながらも、僕は僕なりの意思に従い、その意思を否定されて、その意思を嘲られ、その意思で傷付け、時にはその意思を肯定されて生きてきた。

その逆も然り——他者の意思を否定し、他者の意思を嘲り、他者の意思に傷つけられ、他者の意思を肯定して生きてきた。

だからシェークスピア様——いや、ここは敬愛と哀悼と愛悼を込めて言わせて頂きたい。

「愛なんて積極的な意思を『ほどほど』にできる程、人間は器用じ

やない」

その後の自称幼けな美女、なかなかの行動は迅速だった。

案の定、すぐに店員が駆け付けたのだが、なかなか自分の苗字を口にするなり店員は齡十七歳の少女に何度も頭を下げていた。

僕。というかその惨状から少し距離を置いて二人は話していたので、その会話の内容を事細かには聞けなかったのだが、微かに聞こえる店員の声から、「妻も子もいるんです」とか「マグロ漁船だけは」など、はたまた「こ、コンクリー……ト……」なんて、時代錯誤というか現実錯誤な発言が聞こえてきたが――それは気のせいだろう。

ははっ。まったく僕もどうかしている。最近、鬼なんて非現実的なモノに関わっているから耳までオカシクなってるようだ。

さしてこの田舎で湾なんてある筈もなく、漁船の停まるような港もある訳がない。精々、スワンボートが浮かぶ湖しかないじゃないか。

コンクリートは、きっとこの店の修繕費の請求だろう。いやはや店員さん正論です。喫茶店という心安らぐ場所、破損箇所なんてあったらお客様も気分を害してしまいますもんね。感服致しました、感涙させて頂きました、今後も、この喫茶店を有り難く使わせて頂きます。

……………なかなかって何者だよ。

「あら、お兄様。何度も言わせていただきますが、純情、純粹、純真、純然、純良、純正、純潔で至純、清純たる純国産の乙女、ですわ」

……あの会話を耳にした後だと、その発言は意味を成さないよ。

全ての言葉の最初に『不』と付けてもらいたいね。

「不純情、不純粹、不純真、不純然、不純良、不純正、不純潔で不
至純、不清純たる不純国産の乙女、仙夕ななかです☆」

「何故『☆』を付けた!? 可愛さアピールしたって『不』ついて
る時点で意味を成さないぞ!」

「乙女が可愛さアピールして、どこが悪いんですか!」

なんて逆ギレだ……てかなんという無駄ギレだ。

しかしまあ女性が可愛さをアピールするって所は正論だよな……
いやいや正論ではあるが、その『論』すべき観点が外れているじゃ
ないか。

「しかしお兄様、この輸入国家の日本で不純国産なんて言葉頂けま
せんわね。今、現在の日本を敵に回すのはよろしいですが、自分の
器を測り直した方が宜しいですよ」

「まさか国家レベルで僕の人間を否定されるとは思わなかったよ。
しかも、敵に回すのはいいのかよ」

「敵と言いますか、日本全体が共通の意思を共有できる存在、事柄
があれば、きっと日本は少なからず良い方向を歩みますわ。その為
なら私が敢えて敵になっても構いませんわよ」

「うわ、『敢えて』と付ける事で自分のそぐわない意思って事をア
ピールさせながらもカッコ良さもアピールしてる!」

「ふふふ。今宵も私の右目が日本の明るい明日を欲してる……!」
「……」

なんて、王道展開な日本の未来だ。王道漫画みたいに日本にも救
世主が現れる事を僕は望んでいます。

「敵とは言いすぎましたわ、失言です。流石の私も日本全体を敵に
回したら五割二分で敗戦を記してしまいますし」

「ナカナカの勝率だよ、それ」

「いえ、反省します。こんな失言は禁止すべきですわ……あ、略し
て言うなら『失禁』ですわね、お兄様?」

「思い出したようにいうなよ! そして共感を求めるなよ!」

「とか言いながら、お兄様が、私の卑猥な言動を期待してるのはもう露顕されてますわ」

「いやいや、期待してないから……期待裏切ってばかりだから、お前」

「ふふふ。今宵もお兄様の右脳が卑猥な妄想を欲してる………！」

欲してません。この女自由過ぎるぞ。コイツの人生はエロスと路肩で構成されてるのではないだろうか？

しかしながら、日本の明日を語る高校生というのも素晴らしいのだが、今の僕には日本の明日より、自分の明日を考えなければならぬ。要は日本の敵ではなく、自分の敵——つまり三石きこの対処方法、処世方法を考え、それを解決しなければならぬ。

話を戻すと、あの後、気絶した三石を担ぎ三人で喫茶店を出ると、其処には黒の車、付け加えるなら窓にスモークの掛かった黒の車が待機していて、なかなか「お乗りください」なんて言うから三人で車に乗った——ああ、やっぱり時代錯誤もいいところだ。

そして現在、その車の中である。出発前にななか運転手に何か指示を出し、それを聞き終わると軽快に車は動き出した。後部座席の左右に僕とななが座り、真ん中に現在絶賛気絶中の三石を座らせながら、前述の会話だ。

いやはや、三石が気絶してくれて良かった。やはり、あんな会話を同世代の女性には聞かせたくないしね。しかも、同じクラス的女子生徒となれば、今後の付き合いも考えなければならなくなる——三石と僕に『今後』があればの話だが……。

「いや……起きてるんだけどねえ」

「ぶっ！」

そう言いながら、三石は僕の方をゆっくり振り向く、学校で見せてた人を小馬鹿にしたような笑みを浮かべて、眼は僕の顔一点を睨みつけ、今すぐにでも咬み付いてきそうだった。まるで獰猛な野犬のような、トイプードル要素なんて皆無——言うなれば鬼気迫る威圧感を曝け出しながら——鼻にティッシュを詰めながら……ダメだ。今からシリ阿斯展開に入るはずだ。ここで笑ったらイケナイ。落ちてくんだ、クールになれ。そうだ、素数を数えるんだ。

そんな僕の気持ちを知ってか知らずか、三石はその鼻に詰めたティッシュを勢い良く鼻息で僕に飛ばしてきた……………我慢できなかった。

大爆笑。腹を抱えて、腹を振らせて笑った。息もできない程に笑った。しかもよく見たら詰めたティッシュのサイズが、三石の鼻の穴のサイズの倍以上のサイズだったので鼻も真っ赤だ。いや、女性に対して失礼なのだろうが、面白いものは面白い。やっと笑い終え、息を整えた後に僕は三石に言い放った。

「なにをするだあー！」

分かる人には分かるよね、これ？ 時を巻き戻す能力があるなら今こそ使いたい。そう言うと、三石は憎々しげに此方を睨みつけながら言い放った。

「こっちが、なにをするだあー！ だよ。ふざけるな！ 華の女子高生に鼻血出させといて、笑うなんて最低だよね！」

いやあ……笑ったのは謝るけど、鼻血を出させた犯人は僕じゃないから。どっちかって言ったら僕も被害者な訳ですよ。こんな都合主義というか、ご不幸趣旨というか……。

そんな僕の悲しみにも三石は慈しみの心を微々も出さずにこっちを睨み続けている。

すると、先刻のように三石の後頭部から手が視えた。これまた先刻のように、その手は僕に向けて一回ピース……はせず、その代りに中指を立てた。

その手は、またまた先刻のように三石の髪を鷲掴みにして、自分

の方に勢い良く、勢いに任せて、勢いなんて無視して——引いた、弾いた、轢いた。

突然の事で、三石は「はみゅんっ!？」なんて奇声を発しながら、その勢いに任せられ、後ろに頭を仰け反らされた。(この時、僕は録音機器を買おう、と心に強く決めたのは云うまでもない)

そして、その仰け反らされた場所には——腿。そう、簡潔に言えば、カップルの甘いひとときのスペシャル行事——膝枕の状態になっていた。

無理やりにそんな状態させた張本人は開口一番に嘲るよう言った。

「あらあら、発情した雌犬には、まだまだ血抜きが足りなかったみたいですね。」

仙夕ななかはそう言うのと、前に僕が三石にされたように顔を近づけた。

それは、カップルがキスをする程の距離。

後、一センチでも顔が動けば、唇が重なる程の距離。

「それともあれかしら? 貴女が鬼になる切っ掛けって『発情』なのかしらね? そう考えると鬼の角も艶美な代物に見えますわね」
そう言うのと、長い艶やかな髪をかき上げながら、本当に楽しそうに笑った。そして三石が口を開く。

「黙れよ、忠犬ハチ公。アンタこそ無駄に色気ブンブン散りばめて、何様のつもり? 避妊手術はお済みなのかねえ」

「あら、毒抜きも必要みたいですね。」

「抜き抜き五月蠅いんだよねえ。他のモノでも抜いてろ」

止めてください。純粹素朴な男子高校生が抱く女性への淡く、清い夢を駆逐するような会話はお願いだから止めてください!

しかし、この状態はなんというか……いや、口には出すまい。美

女二人が、そんな接吻する程にまで顔を近づけて卑猥な単語を並べた会話をしてるなんて……悶えてしまうじゃないか。なんて言うまい………あつ。

兎にも角にも美女二人の邂逅、そして対抗が行われているのは狭い車の中——よく考えれば、僕はこの車の行先をまだ把握してないじゃないか。そう思っても、今のこの現状、この二人に話を振る事などできる訳もなく、救いを求めるように運転手の顔をバックミラー越しに見つめていると、その運転手は後ろで展開される百合的展開を見つめながら御満悦な顔だった……運転手さん、前、見てください。

そして車は、運転手の気持ちと相まるように速度を上げた。

次回は血で血を洗う、ある意味胸がドキドキな濡場が展開される事を僕は確信した。

（続く）

鬼『子』の眼にナミダを 拾貳

拾貳

先にも言ったように、僕は、この物語の語り部を担っている。

準備を行う事を出来ず、順序を把握する事も叶わず。突然に、唐突に請け負わされた『代役』。

そう。『代役』だ。

僕なんかよりもっと上手に、もっと的確に、もっと人道に物語の道筋を、終焉を迎えられる人はいたと思う。

『運が悪かった』なんて簡単な言葉で終わらせてしまえば、それまでだろう。

——しかし、『運が悪かった』のは本当に僕なのか？

僕だけが『運が悪かった』のだろうか？

齢十七歳の女に首の振り一本で、こき使われている運転手も然り。店を壊され、挙句の果てに時代錯誤な脅しを突きつけられた店員も然り。

僕が外出する為に夕食の準備をしなければならなくなった、ほがらかも然り。

みんながみんな、『運が悪かった』のかもしれない。

だがしかし、もっとも『運が悪かった』のは……。

こんな事に優劣を付けるのも、痴がましい事なのだが……。恐らく。いや、きっと。

三石きこ本人だったのだろう。

もっと詳しく言うなら――。

僕に秘密を見られたが為に、『仙夕ななか』に目を点けられた三石きこ。

多分、その時点で最良から最善から最安から見捨てられたのかもしれない。

只今の時刻、十九時二十分。車に揺られて早二時間。

僕等は廃墟に居た。

詳しく言うなら、廃病院。

事細かに言うなら、二年前に潰れた僕の住む街から少し離れた廃病院。

何故そんな所にいるのかというと、正直、僕にも分らない。だって教えてくれなかったんだもん。

僕が「何処に行くのか」と聞いても、ななかは「素敵に不適な場所ですわ」なんて意味の分からない事を言って、会話を終わらせてしまう始末。

何時もの素敵な笑顔に不適切な発言は何処に行ったのやら……。な状態で寂しさと、恐怖と、ちょっとした期待感を心に秘めながら車に揺られてドンブラコ。で今に至る、という訳。

おっと。これでは僕がななかの卑猥な発言も、罵倒な発言も楽しみにしているみたいじゃないか。

断じて違います。僕はどちらかといったら亭主関白なのだ。女性には大和撫子宜しく、一步後ろを歩く心意気で付いて来て欲しいし、僕が帰ってくるまでは夕食は食べたらいけナイし、僕より先に寝てはイケナイし、僕より後に起きてもイケナイと思っているのだ。

その証拠に、十歳の頃にさだまさしの『関白宣言』を聞いて涙を流す、という快挙にまで成し遂げたのだ。十歳でこの快挙を成し遂げた男といったら、この世で僕くらいなモノだ。将来、就職の時に自己アピール欄に堂々と書いてやろう、とも思っている。

その事を、妹のほがらかに自慢げに話したら、「へえ……ってかウザイ、キモイ、臭い、惨い、酷い、鬼畜」と宣言され、涙を流したのも良い思い出だ。

話しが逸れた。

廃病院である。しかし、先にも述べたように、ここは僕の住む街の廃病院であって、三石きこと関係のある廃病院ではない。だからといって、何も考えずに、この場所を選んだとは思えない……。いや、なかなかあり得るのか？

僕が当事者——つまり、三石きこの立ち位置なら、違う場所とはいえトラウマのある場所だ。

トラウマ——そんな言葉では言い表せない程の場所。

その証拠に、三石は、ずっと眉間に皺を寄せていた——苦虫を噛むような表情と言えはいいのだろうか。とにかく、居た堪れないというような表情で僕の後ろを付いて来ている。

しかし、不思議な事がある。

何故、三石きこはついて来ているのか？ という事だ。

その力は、正しく鬼のように力強く、この一介の高校生二人（プラス運転手）なら、有無を言わさず黙らせれた筈だ。

暴力に暴力を上塗りし。

墮落に墮落を叩きつけ。

陵辱に陵辱を押し付ける。

それを出来る力を持ち、行使出来る筈なのに、何故行わなかったのか？　こんな誘拐紛いの……いや、これは完全に誘拐だな。そんな事をされても、三石は車の中でも剣呑な表情でコチラを睨みつけながらも、暴力に打って出る事はなかった。口を固め、眉を寄せ、僕をずっと睨みつけていた……何故、僕なんだ。

いや、僕、今日は本当に話をする為だけに来ただけだから。そんなテールで貴女の頭、カチ割ろうなんて思ってませんでしたから。そんな目で僕を睨まないでください！　その視線が痛いです！　その視線をご褒美に出来る程、僕は人間できてませんから！　……なんて思いながら、僕は車に乗っていた。

しかしだ。しかし、僕だけを睨んでいた。つまり、最初の会話以外、ななかには一度たりとも、視線を合せていないのである。ましてや会話なんてある筈もない。

無意識ではなく意識に。

過失ではなく故意に。

偶然ではなく必然に。

ななかとの全ての関わりを拒む様に。

ななかが言葉を話すと、それが現実になるのではないか？　とか、

なかなかの左目を見ると、どんな命令も聞いてしまうのではないのか？ と、言霊遣い宜しく、ゼロ様万歳、な事は思わなかったが——しかし、今になると妙である。

そんな事を考えながら歩いてるのは、廃病院の廊下。

——思った以上に綺麗だな。僕の勝手な想像だけど、もう足場はボロボロで、歩く場所を間違えると崩れたり、鼠とか、今まで見た時のない虫とかがウヨウヨいるのかと思っていたが……。

確かに足場は綺麗とは言い難いが、それも許容範囲の、安全が確保できる程で、そこまで壊れてない。鼠の足音も聞こえないし、虫だって、精々、蜘蛛の糸が張ってあるくらいなものだ。

流石に、電気まで通ってなかったが、なかなか大型の懐中電灯を持ってきたので解決済み。

しかし、そんな綺麗な、言ってしまうえば肩すかしな場所だったが、いや、だからこそ、『ここには長くいたくない』と感じた。なんと言葉で表せばいいのか、自分の文才の無さを悔やむばかりだが……素直に、単純に、明快に。

——怖い。

そう思った。明かりが無い、というのも理由としてはあるのだろうと思う。しかし、なによりも——。

『人がいない』、というのが怖かった。

歩く足音が異様なまで響く廊下。

自分の心臓の鼓動が鮮明に聞こえるほどの静けさ。ライトの明かりだけを頼りに進む程の視界の悪さ。

人が沢山いた筈の場所。

独りぼっち——孤独。

三石は小さい時から、こんな感覚をずっと感じてきたのだろうか。

少し歩くと、少し広い場所にでた——多分、簡易待合室だろう。

その証拠に、病院では絶対に有る、座り心地の悪そうな一脚につき四繋がりのソファが二つ、対面式に並べられていた。

そこでやっと、ななかは「どうぞ、コチラにお座り下さい」と指を指した。それに従うように、僕と三石は右側のソファに座り（この時、席を二つ空けられたのは言うまでもない）、ななかは、反対側の三石の真正面に座った。その時、埃が舞うのではないか、と懸念したが、微分にも舞う事はなかった——ななかが事前に掃除でもしていたのだろうか、それはそれで笑える風景だ。

少しの沈黙、本当に少しの沈黙の後——ななかが組んだ足を左右入れ変えた後に、口を開く。

厭らしい笑顔なんてモノではなく、妖艶な顔で三石を見つめながら——。

一度、舌で自分の口を舐めまわして——。

今のこの現状を楽しむ様に話しだした。

「私はね、キコさん。結局のところ、当前のところ、心の芯の髓から、貴女がどうなろうと知ったことではないのですわ。」

）
続
く
）

鬼『子』の眼にナミダを 拾参

拾参

「私はね、キコさん。結局のところ、当前のところ、心の芯の髓から、貴女がどうなろうと知ったことではないのですわ。

貴女のくだらない前口上も。

貴女の掃いて捨てる程に在り来たりな物語も。

貴女の独りよがりな独白も。

貴女の慰めを渴望する納口上も。

貴女が存在を構築する、全ての要素が私にとって本当に、本当にどうでもいい事なのですわ、三石きこさん。

あら？ そんな顔をなさらないで？ 日本人形のような可愛いお顔が台無しですわ。

申し訳ないのですが、そんな剣呑な顔で睨まれても、戦々恐々してしまうだけですの。

それをご褒美に出来る程には私も人間が出来てませんので——ごめんなさい？

それに、私は同性を愛でるような趣味は毛頭に、毛根の髓の髓までに持ち合わせてないの。

同性愛を否定は致しませんわ。ルートのように聖書に記すような、サウジアラビアやイランのように死刑に処するものかどうかと思いませんしね。

そう自由なのですわ。

恋愛は否応なく自由ですわ、三石きこさん。

誰が為に自身を費やし、誰が為に自身を犠牲にし、誰が為に自身への災を厭わない。

それと同時に――。

誰が為に他人を費やせ、誰が為に他人を犠牲にし、誰が為に他人に厄を撒き散らす。

それもれっきとした＞愛の象々なのですわ。

革命だってそうでございませう？　どんな革命だって、原点は＞愛の為の行動く。

それを向けるベクトルは千差万別ですが、愛の為に先駆者は立ち上がり、拳を掲げ、大地を震わす程に声を高らかに上げたのですわ。

ふふっ。お兄様、話しが飛びすぎてる、ですって？

いいえ、まったく飛んでおりません。私の話はこれっぽっちも飛んでおりませんわ、正道をまっしぐらに進んでおりますわ。

だって、そうでございませう？

三石さんは、私の＞愛くを犠牲にして、自分の＞愛くを守ろうとした。

その一点なのですわ、お兄様。

あら？　そんな鳩が豆鉄砲くったような、ずっと母だと思ってた人が実は父で、乳はしっかりあるのに貴方は父でしたか、こりゃ参ったね。はっはっは……。みたいな顔で驚かないでくださいません？

——えっ？そりゃ驚くって？

お兄様。お兄様は、どこぞのラブコメの主人公ですか？ まさかと思いますが、私のこの想いに気づいてないとても仰るのですか？……本当に気づいてなかったのですか。

流石の私も溜息モノですわね。鈍感さえも通り越して、お兄様は無感なのかもしれませんわね。それはある種の罪ですわよ、お兄様？
こんなにまで愛情を曝け出してるのに、それをなにも感じ取ってもらえないと分かったら、常識ある乙女なら自殺ものですわね。

いっそお兄様みたいな男性はこの世からお亡くなりになった方が、この世の為かもしれませんわ。

——しかし、ご安心くださいませ。

そんなダメ男な、害虫以下のお兄様ですが、私は、それはもうどうしようもなく愛しておりますわ。だから、勝手に死んでしまったらいけません。死ぬ時は私におっしゃってくださいまし。死ぬ直前——、いえ、死んでからも私をお忘れにならないように、甘く、凄惨な殺し方でお兄様を殺して差し上げますわ。

まあ、お兄様を卑下する事は、またのお楽しみ、ということと話を戻させて頂きます——、えっ？ やっぱ話が飛んでるですって？

さてさて、三石さん。先述も述べたように、私は貴女になんか、これっぽっちも興味が無いのですわ。

では何故、こんなにまで貴女に執着するか、粘着するか、という疑問が出てきますわね。

まあ、お兄様から三石さんを助ける。という話を聞いたから、というのがありますが、正直に申し上げますと、私はその＞助ける＜に關しては了承した覚えはありませんの。

お兄様。そんな怪訝なお顔をなさらないでくださいませんか？ 私

は「ワン！ ワン！」としか言っておりませんの。

あらあら、またそんなお顔をなさって、アルパカ面というより、もう只の馬鹿面ですわね。

見て下さいませ、この身体を。どう見たって、＜人間＜でございましょう？

確かに同じ脊椎動物で、哺乳類に区分される二つですが。

この艶かしく艶やかで、放漫なまでに豊満な色気。

全ての異性を魅了する丹精なまでに端正で端正な顔はネコ目イヌ科イヌ属には到底真似できない事ですわ。

まあ、お兄様が獣趣味というなら、私も不承不承ながら犬耳、首輪、尻尾を着用して、金輪際、「ワンッ」としか言わないでも構わないのです——バター犬にだってなり下がる心意気ですわ。

と、このように三石さん。私はこのアルパカ面で馬鹿面の男性に熱なのです。ベタ惚れなのです。どうしようもない程愛しちゃっているのですわ。

そんな相手が、他の女性を＞助けるくなんて言い出したから……。胃も肺も心臓も耳も脳も子宮も……その他多くの器官は荒縄にきつく縛られたように悲鳴を上げ——。

幹細胞、造血幹細胞、血球、神経幹細胞、神経細胞、ナチュラルキラー細胞は異常なまで細胞分裂を行い——。

酸素、炭素、水素、カルシウム、リン等の分子は全てが窒素に朽ち果ててしまう程にまで——。

悩み、苦しみ、嘆き、怒り、そして何より……。

嫉妬しましたの。

ふふふっ。＞嫉妬くとは恐ろしいモノですわね。こんなにまで私が異常な＞行動くを行うとは思いませんでしたわ。正直、自分でも驚きですよ。

赤の他人の貴女の情報を得るために何キロも離れた遠方の土地にまで向かうなんて事もしてしまいました。

赤の他人の貴女の行動を把握する為に何人もの人間を動かししました。

赤の他人の貴女を追い込むため、愛しいお兄様までも犠牲にいたしました。

もう自分でも、滑稽な程に滑稽ですわ。

しかも、蓋を開けてみたらなんて事ない。

只、単に＞昔好きだった男が忘れられないくだけじゃないですか。

私だって、鬼じゃありません。貴女は鬼に成り下がってしまいました。たが。

私は純情なまでに人間。

純粹なまでに人間。

純真なまでに人間。

純然なまでに人間。

純良なまでに人間。

純正なまでに人間。

純潔なまでに人間。

至純なまでに人間。

清純なまでに人間。

人間。仙夕なかなのですわ。

嫉妬にいきり立つ心もあれば、涙に頬濡らす心もあります。

もっと深淵で、もっともっと深遠なお悩みなら、私だって助力を厭わないつもりでいましたの。

三石さん。三石きこさん？

死者はどんなに願おうが戻ってきませんわよ。

貴女が三ツ石の神と、どのような契約を交わしたなんて知った事ではありませんけど、粗方の予想はつきますわ。

神の戯言に弄ばれてるのも知らずに……いえ、知っていながらもなお、嘘の契約に縋るだなんて、馬鹿馬鹿しいにも程がありますわね。

その契約の為に、私の愛しい人に危害を加えるだなんて、もっての他ですわ。

貴女の愛の為に、お兄様の日常が一ミリでもズレが生じるのならば……。

私はどんな凄惨でも――。

どんな残酷でも――。

どんな残酷でも――。

どんな勝手でも――。

どんな無法でも――。

どんな無用でも――。

どんな無秩序でも――。

つまり、どんな手を使ってでも、私の平凡な＜愛＞を守りますわ。

さあ、三石さん？　ここは廃病院なんて廃れた、意味のなくなった場所ではもうありませんの。

今、ここで、この宣言で、ここは戦場に変化いたしました。

自分の事だけ考えましょう。

自分の愛の事だけ考えましょう。

生き残るのは、否応なくどちらか一つです。

自分の為の自分による自分だけの、愛の為に戦争を致しましょう。

愛の為だけに革命を致しましょう」

（続く）

鬼『子』の眼にナミダを 拾肆

拾肆

会話というには一方的で、独断的で、偏見的で、さながらナチスドイツの掌握的意見を押し付ける様な、その語りに僕は聞き入っていた。

愛の為の戦争だと？

愛の為の革命だと？

それは高校生が言う台詞にしては、浅はか過ぎて、なにより仰々し過ぎるのではないだろうか？ と感じたが、当の本人、仙夕なのか、自嘲する事なく、自重する事なく、三石きこに言い放った。

僕は三石きこ本人ではないので、彼女がななかの話しを、どこまで、どのように、何を感じ、そして考えたのかなんて詳細には分からないが、一つだけ分かる事がある。

三石きこも、僕と同様に聞き入っていた事。

それは、三石がななかの話してる最中に、一言も発しなかったという理由もあるのだが、それ以上に——それ以外に何もなく。

力があるのだ。

ななかの一語、一語には力があつた。

ななかの一句、一句には魅力があつた。

確かに、相手を聞き入らせる会話のテクニックというのは、世間でも随筆文として一般的に販売されて、容易に真似るゝ事はでき

る。

しかし、それだけじゃない——いや、それが無いのだ。

継ぎ接ぎで、滅茶苦茶の会話。

他者の考えなんて一切適切おかまいなしの会話。

自分による、自分の為の、自分しかない会話。

会話というには不完全過ぎる会話。

それなのに——いや、だからこそ。

仙夕ななかの言葉だからこそ、魅力のみで構成された戯言紛いの会話だからこそ、押しつける様な擦り付ける様な会話だからこそ——魅了されていた。

というか僕、とてつもなく唐突に告白されてませんでしたか？

確かに嬉しいといえますか、有り難いといえますか、とにかく感謝の気持ちを出すべきだと思うのだが……。

この場面で、そんな事を言われても、嬉しいと言うよりは＞憂しいくって感じだし、有り難いというよりは＞度し難いくって感じなのです……？

いやいや、ななかからしたら、それが原因で、ここまでの大袈裟な行動に出たんだから、それはつまり必然な訳で……。

あれ。という事は、僕が原因なのではないだろうか？　ってか僕が原因じゃないか。

僕の安易な——言い訳をさせてもらえれば、自分では安易な考えではないと思ってたのだが——とにかく、僕の言動が、行動が、仙夕ななかをここまでの所業を振る舞わせる原因になってしまったのか。

「違いますわ。お兄様」

ななかは、そう言い放った。というかお前、なんで僕の心の葛藤にまで突っ込みを出来るんだ！？　さながら意思の疎通が出来るように。

「確かに、お兄様の言動や行動に、“因”がないと言ったら嘘になります。所詮は鯨偶蹄目ラクダ亜目ラクダ科にそっくりな面した男の戯言、私にとっては、そんなモノはたかだが遠因にしかありませんわ。ゴミ以下ですわ」

こいつ、僕の事好きなんだよな……？

「だから先程も言いましたよね？　三石さんは“私の愛を犠牲にしようとした”のですわ。その一点のみ。それ以外の原因も、要因も、サッパリもってパツカリ割ってバツサリ搔っ捌いても、何処をどう探してもありませんわ」

「いや、だから、そのあ……あい、あ……愛してる対象が、ぼ、僕なんだろう？」

「その通りですわ。私、仙夕ななかは愛しておりますわ。お兄様を。」

そう言いながら、ななかはウィンクをしてみせた（これがまた似合う）。

いや、その……有り難いんだけど、そう面と向かって言うなよ。すんごい恥ずかしいじゃないか……。

「だから、その僕が『三石を助ける』って言っちゃったから、お前は——」

「勘違いなさないで」

その一言に、僕は言葉を停めた。その、感情という“熱”をはち切れんばかりに詰め込んでるのに——どこまでも、果てなく冷たい一言に。

「勘違いなさないでくださいませんか？ 例え貴方でも、言っ
て良い事と悪い事がありますの」

その美しい顔からは、到底想像できない程に、冷淡で、冷血で、
冷艶で、冷却で、冷酷な目つきで僕を冷笑しながら……ななかはそ
う言った。

「“助ける”とは貴方の言葉でございませう？ 私はその言葉に、
心意気になんの感動も、ましてや解釈なんてしておりませんのよ。
私が……私だけの感情が勘定無しに垣根無く“嫉妬”した。——と
仰いましたよね？」

なにより、いつもは“お兄様”と嘲るように呼んでいるのに、今は
——。

“貴方”と言った。

「それを貴方は、なんと理解したのか……“自分のせい”なんてほ
ざきやがりますか。それは優しさでございますか？ それとも憐み
？ 同情？ はっ！ お笑い草ですわね！」

そう言いながら、ななかは髪を掻き上げた。本当に僕を馬鹿にす
るような——憎しみとか卑下とか憐みとか……そんなモノが一切皆

無の、混じりっ気なく僕を馬鹿にするような顔で――。

初めて言われたかもしれない。いや、確かに“貴方”と言われるのに慣れていない訳でもないし、逆に“お兄様”なんて言う方が可笑しいのだけど……正直に言うなら――。

「いいですか？ この感情は……この〈怒り〉は、この〈嘆き〉は、この〈嫉妬〉は私のモノなのですわ。貴方が介入する事なんて、まったく無理なのです。だから……ねえ？ お兄様。私の愛しいお兄様……？」

“寂しさ”を感じた。

「手前の感情を押し付けるな。擦り付けるな。――遺憾だ」

女性に対して、素直な、実直な、愚直な“恐怖”を再び体感した。血脈が凍り付くとか、心肺機能が停止するとか、そんな身体的な恐怖ではなく、もっと人間の根本的な“なにか”が怯え、寒け、恐れるのを僕は感じた。

ああ、そうか……これが『仙夕ななか』なのだ。

“自分のモノ”をどこまでも、執拗に執着するのが彼女だ。

“自分のモノ”をどこまでも、永遠に愛でるのが彼女だ。

“自分のモノ”に傷が付くものなら、身を呈して全力で守るのが彼女だ。

“自分のモノ”を傷付ける相手を、何度でも――何度なんて無い程に突き続けるのが彼女だ。

“自分のモノ”に対する矛盾も不純も――全てを肯定するのが彼女だ。

初めて知った……初めて？ いや、違う。僕は知っていたんだ。
ずっと昔から。ほんの昔から。

彼女が“そういう女性”だという事を忘れていただけなんだ。

だから、次に出る僕の言葉は“当たり前”の事だと、自覚している。

その凄惨な笑顔をする仙夕ななかに対して、僕は唇を歪めて、彼女の瞳のみを見つめて……言った。

「可愛過ぎるぞ。仙夕ななか」

その言葉に仙夕ななかは、目を満月のように丸くした後、この世界に溶けてしまう程の恍惚な表情を浮かべて――。

「そんな事、全世界が周知している事ですが……お兄様に言われると、特別に格別で絶品な響きですわ」

冗談混じりで本気混じり。

嘘だらけで真実だらけ。

大なり小なり。

矮小で仰々しい。

愛のみで愛のみ。

そんな彼女……仙夕ななかを、僕は久方ぶりに真正面から見つめ、

受け止めた。

）
続
く
）

鬼『子』の眼にナミダを 拾伍

拾伍

「それでは三石さん。革命の続きを致しましょう」

ななかは座っている三石きこに向けて告げた。その矮小で仰々しい言い振りは変わらず。だから当然に、だから断然と『革命の続きを行う』と。

その言葉を聞いた三石きこは陶然とした表情で、されど憎々しい表情で三石を見つめている。

僕には、その表情に意図が図りかねるのだが、ななかはそうではなかったらしい。その顔を見て、ななかは本当に嬉しそうに――。

「やっつとすわね」

そう言った。それは誰に言うでもなく、突き抜けた廃病院の天井、淡い夜空に向けて独り言のように呟いた。これが絵になるものだから、僕は見惚れてしまう。まるで美術館にある有名な絵画のように綺麗で儂いのだ。

その独り言に対して異見、はたまた罵倒を言うと思ったのだが、三石きこは無言のまま、ななかを睨みつけている。どうしてだろう？ 車の中の三石とななかの罵り合いときたら、男性が女性不振に陥りそうな程に酷く酷い会話だったのに……。

「ふふっ。何も言えませんか？ 何も言えませんか。その顔を見る為に、この廃病院に連れて来て、貴女みたいな独りよがりを書いて、お兄様を罵倒してきたのですわ」

いや。罵倒はいつもの事だろう。とツツコミたかったが、ななかは本当に嬉しそうな表情で言うものだから僕は自重した。いや、自重せざるえなかった。

そこで、やっと三石は堅く閉ざした口（追加で述べるなら可愛いアヒル唇）を開き――。

「……何がさ」

「『何がさ』ですか。はっ！ まだそんな事を仰いますか？ まるでなってますんね。マクドナルドでシナシナなフライドポテトを出された時並になってませんわ！ ねえ。お兄様？」

そこで僕に話を振りますか。その例えは些か……っというか、全然なっていないのだが。だから僕は言ってやった。

「ななか。お前の口ぶりはいつも無駄に長い。無理やり紆余曲折させて、罵詈雑言、悪口雑言を吐き散らしたいだけに思うのだけど。それにだ。その例えより、ケンタッキーで最も美味しい皮の部分が自分のだけすごく小さかった時並になってない。の方が納得できるよ」

「まあ。そんな事は置いときまして」

「……………」

間髪入れず話を戻しやがったよ。っというかそう思わないのか？ 国民だれもがこの一場面に出くわしたら、なってる。と感じてしまうのではないだろうか。

「まあ。そんな皮は捨てときまして」

「間違ってもいないのに言い直したな！？ 全国のケンタッキーフライドチキンの皮の部分ファンに謝れ！」

「そう。『やっど』なのですわ、三石さん」

「だからなにがさ？ 愛しのお兄様に『可愛い』なんて言われて御

満悦なのかねえ。学園のアイドルもナカナカ乙女な所を見せてくれるねえ。——気持ち悪い」

そう吐き捨て、ワザとらしく両手を左右に広げ、頭を横に振った。喋り方も最初の時のような人を馬鹿にするような喋り方で。

それを見て、またななかも顔を厭らしく歪めて——。

「嫉妬」

と一言。その言葉を聞いて三石きこは顔を赤らめ、ソファから立ちあがった。

「はっ!？」 ふざけないでほしいね! なんできこが、こんな家畜動物みたいな、人間の駄目なパーツだけを組み込んだような男で嫉妬しなきゃいけないかね!」

ひでえ。当の本人の前でそこまで言いますか。……しかしだ。しかし、もし間違ひなら、ここまで全力で、鬼気迫る程に否定はしないだろう。三石きこなら、きっと鼻で笑って流すはずだ。

「いえいえ、これは『嫉妬』ですわ。三石さん。貴女は純粋なまでに『嫉妬』してますわ。可愛いですわね。——あらやだ。私、同性愛者の気持ち少しばかり理解しちゃいましたわ」

「ふ、ふざけるな! だから、どうしてきこが、あの男で嫉妬しなきゃイケナイかね!？」

「だからですね——」

ななかもきこと同じように立ちあがった。身長差からななかが三石きこを見下ろす感じになっているのだが、それはもう『見下ろす(みおろす)』というより『見下す(みくだす)』と言った方が正しいのかもしれない。——それは絶対勝者の立ち位置のように。

「三石さん。貴女、私の『愛』に嫉妬しちゃいましたわね」

そこには勝者の顔が在った。余裕を見せ、余裕を魅せて堂々とな

なかは言った。

それに対して三石きこは「うー……！」っと唸りながら、一步後ろに後ずさる。それは生まれて日の浅い野良犬が威嚇をしているように視えた。

「それはそうですわよね。嫉妬しちゃって当然。だって存在しない人間に恋なさってるんですから。不実な恋を貫いてる所に、目の前で存在してる二人が愛を語ってるんですものね」

その言葉に三石きこは目をキツと細めを一步前に出る。但し、それは前に僕にした時のようにではなく、今にも崩れそうな最後の砦を意地でも守ろうとしてるように。

「たたらは！ たたらはきこの在り方を唯一認めてくれたんだ。たたらが居てくれたから、きこは友達もできた。たたらが聞いてくれたから言葉も覚えた。きこにはたたらが必要なんだ！ たたらが存在しなきゃきこは……」

「存在してる意味なんてないよ……」

その時、何故三石きこが鬼になったのか、鬼になり下がったのかが分かった。

彼女は賢く臆病な子、だから自殺なんて出来なかったのだ。しかし、言果たたらのない世界では自分の在り方、存在の意味、生きる意味を見いだせなかった——それは『人間』という存在を全て否定していると等しい。だから神様に、神様という人間外の存在に願って、縋って、請うた。

——生きる意味を返して。と。

正しく最後の要、神頼み。それは一方的な押し付けで確約されない確約。しかし、その頼みは成就されたのだ。それが少し、三石きこの願った願いとはズレて……。

神様なんて存在は本当に曖昧なんだ。いるかいなか？ と聞かれれば、僕は曖昧な返事を返すだろう。だって、いるにしてもいいにしても、この世界は僕等『人間』にとって不誠実だと思うから。確実に存在してるとは言えない。だけど、存在してないと言ってしまうのは寂しい。――僕等は本当に弱いのだ。

しかし、神様は存在したのだ。だから、三石きこの願いはズレながらも叶った。その曖昧な存在は確定された。だけど、だからといって人間と神様との関係が確実たるものになったかは、また別の問題。

人間と神様の関係は曖昧なのだ。どちらが上で、どちらが下で。どちらが最初で、どちらが後で。そんな曖昧な関係での制約。そして三石きこは生きる意味を返してもらった。

それは『人間としての生きる意味』ではなく『人間外としての生きる意味』。

鬼という僕等、人間側での物語の存在、伝奇の生物として。

神様、貴方を恨むよ。架空でも不誠実なら僕等『人間』はどこに、誰に縋ればいいんだ。

「幼稚な発言ですわね」

その一言は冷めていた。三石きこの切実な訴えを聞いて尚、その言葉が出てきた事に僕は絶句した。それは余りじゃないか。だから、僕は立ち上がり、ななかに向けて――。

「おい！　なんだよ、その言い方は。お前には血も涙もないのか！
？　お前こそ鬼じゃないか！」

「……いいえ。私は人間です。鬼は其方の方ですわ、お兄様」

「だからって……だからって言い方とかもあるだろ？」

「だったらどう言えと？　私が優しく介抱すれば、三石さんは満足
できるのですか？」

「違う！　違うけど……」

確かに、なかなかの言ってる事は正しい。けど、今の言い方はあんまりだ。だって僕等『人間』には言葉では言い表せない程にどうしようもない時があるのに。しかも、三石きこに関しては……。

なかなか僕は顔を近づけて睨み合っていると、なかなか不意に三石きこに顔を向けて言った。

「三石さん。貴女は言果たたらさんという方を生き返らせてほしくて、神に願ったんですわよね」

その言葉に三石きこは顔上げ、小さく頷く。なかなかそれを見て、少し悲しそうな顔した。そして言葉を続ける。

「そうですか……。そうですね、それならば納得しましたわ。貴女が『鬼』になり下がった事も」

「……どういう事？」

「だって、その願いは元から叶う事なんてなかったんですもの」

その言葉に三石きこは小さく「えっ？」とこぼして、目を丸くした。今からなかなかの台詞を事実を真実を僕は知っている。だからこそ少しでも三石きこの心を壊したくなくて、あぐねていたのに。僕がななかに対して、言葉を発しようとしたのだが、その前にななかが目の前に手を突き出して制止させる。

「三石さんの生きる意味は言果たたらさんでした。だから、神様も

叶えられなかった、という意味です」

「だ……だから、どういう意味なの？」

「だからですね——」

「言果たたら、という人間はこの世に存在しなかったのですわ」

鬼『子』の眼にナミダを 拾陸

拾陸

始まりとも言えない儚げで朧げな存在に三石きこは魅せられた。それは僕がななかに魅せられるような感覚と似ていたのだろう、と今の僕は思う。

誰しも言葉では表せられないような、心でしか曝け出せないような感覚に襲われる時があると思う。それはななかに対する僕や、言果たたらに対する三石きこのように。

偶然にしては無理やり過ぎて。
運命にしては曖昧過ぎて。

この感覚を言葉で表せるのなら、きっとななかのいう戦争や革命は起きなかったはずだ。世界は平凡で世界は大衆で世界は単調であったはず……とまで言ってしまうとななかのように仰々しくも矮小、だから子供の戯言だが、それとなくなんとも思ってしまう。思いたくなる。

——願いたくなる。

だから僕はどこか自分に似ている、それこそ言葉では表せられないように、三ツ石の神に『願った』三石きこなんて、鬼なんて存在に自ら首を突っ込んだのかもしれない。

「どう言う、事……？」

「そのままの意味です。混濁無しの伏線皆無。そのまんまの意味。言果たたらという人間はこの世にいません、という意味です。存在しなかったのですわ」

ななかは淡白に飄々と言った。それが三石きこへの最後通告、最終宣言、死刑宣告そのものだというのに、まるで学校であまり喋った時のない同級生と会話するように、人間味はあるが何処か無機質で、温もりがあるのだが何故か冷たい会話。

それこそ僕が最も恐れた結果だったのだ。仙夕ななかという人間は『それ』が出来てしまう人間だという事を知っていたはずなのに。

僕はその事を事前の電話で把握していた。『言果たたら』という人間は存在してなかったのだ。この存在とは昔生きていて今はもういないとか、何かの生まれ変わりとか、ましてや『幽霊』なんてものではなく、まったくもって何処をどう探しても存在しない。伝奇にさえならず伝記になんてなりえない。

妄想。

三石きこの妄想。言果たたらという存在は三石きこによる架空の人間だったのだ。根源はあるが根拠のない二次妄想の類。

ただそれだけだったのだ。

三石きこの人生には友達といった友達は中学の時の『言果たたら』という妄想を作るまではまったくの皆無。それまで一人で孤独に自由に生きていた。

そう、自由にだ。

人間関係という複雑怪奇な代物に対して自ら背を向け、人間模様という支離滅裂な代物に立ち向かわなかった。自分の都合の良い様に生きて、自分の都合の良い様に解釈していたのだ。

子供の頃の癖は大人になっても直らないというが、得てしてそんな感じ。自分で言っていてどんな感じ？ とツツコミを入れたくなるが、まずそんな感じだと僕は考える。

彼女は独りでいる事に慣れてしまったのだ。

まだ十七歳の僕等だが、まだ子供だとも理解してるのだが、今よりもっと子供の時代の癖だ。それこそ取り払えないし直せない。根源にギツシりとビッシリ張り付いてへばり付いて、風呂場の垢のようには簡単には取れない程に三石きこは独りでいる事に慣れてしまった。

孤独が三石きこの『普通』だったのだ。

それはもう救いようも無い程に。

では何故、三石きこが『言果たたら』という妄想を自ら作り上げたのか。という疑問が出てくるだろう——そんなものは簡単だ。人目である。

三石きこは孤独ではあったが一人でないのだ。いや、これは世界のどんな人間にも言える事で、在り来たりな言葉で申し訳ないが――。

人は孤独に生きていけるが一人では生きていけないという事。

幼稚園、小学、中学、高校、そして僕はまだ経験してないが大学に社会。その中で形成される人間関係に集団生活。

それら全てに背を向け、息を潜め、拒否し続けた。

しかし、良い事なのか悪い事なのかは個人の解釈に任せるとして、そんな少女を、そんな異才な少女を他の人間は無視できるだろうか？

僕も記憶にあるのだが、小学の頃に独りでいつもいた同級生はやはり異彩を放ち、端的に言えば目立っていた覚えがある。

ましてや、三石きこだ。その唇だけでも涅槃に達する程の魅力。

いや、僕の主観に則り、唇と云ったが、三石きこは客観的に見ても可愛い。外国では日本の女性が人気があると聞いた時があるが、その類に入る可愛らしさだろう。そりゃ、みんなが注目もする。

そう。人間は天才も奇才も異才もひとくくりにしてしまう癖がある。

その本人が望もうと望まなくとも……評価され、区分され、区別され、そして隔離される。

ここまで否定的な言葉を言わせてもらったが、この事に関しては、当事者に対して僕はなんら同情もしないし、自ら救済もしない。だってそうじゃないか。

人間は変われる。

「変わらぬ美しさというのもありますけどね」

ななかはそう言いながら自分を指さしていた。

否定したいなあ。

まあここで否定したとしても、この女は何も聞かないし、何も効かないのは分かっているので口を閉ざしておく。

静寂。三石は何を言ってるのか分からないという顔でななかを見つめている。

三石きこに対して、ななかは淡々飄々と言葉を向ける。

「三石さん。私は貴女の事を色々と調査したのは言いましたよね？」

殺人事件さながら、浮気調査さながらの調査を致しました。今の私なら貴女の好きな食べ物から好きな殿方のタイプ、はたまた貴女の脇毛の処理期間までも知ってるかもしれませんわ」

それは気になるな……いやいや。

「そんな私が言果たたらさんの事に辿り着いたのは、是当然。女之感、感じて悶えて果て参じて、この方に何かがあると私は踏みましたの。しかしですね、『なにもなかった』のです。いえ——『何も無さ過ぎた』のですわ。貴女の他の友人に言果たたらさんの事を伺っても、皆さん『名前は知っているけど見た時はない』とのこと」

そう言いながら、ななかは三石きこへと一步一步、闊歩闊歩と向かう。

「おかしいですわよね。誰も見た時がない人物なんて、そんなの居る訳がありません。写真もなければ、経歴もない。そんなの生き

ていえるのでございましょうか？　だから私はこう推理いたしましたの」

三石の前に立ち、ななかは顔を近づけて、最後の言葉云う。

「これは貴方の、三石きこというメンヘラ妄想少女が作り出した架空の人物で、正しく夢物語の登場人物だったのではないか、と」

風が切れる音が聞こえた。

それと同時にななかの黒い髪が空で舞っていた。

今、僕の目の前に見える光景から推測するに、三石きこがななかに対して、鬼の力を以て拳を振り上げたのだと思う。

それは正しく一瞬の出来事で、開始さえも曖昧にさせる程の早さだった。

しかし――。

しかし、何故そんな一瞬をななかは避けたのだ？

そんな疑問をかき消すように、三石きこは拳を再度ななかに向けて振るう。

「たたらは絶対に存在した！　だから神様は私の願いを聞き入れた！」

その言葉と行動は、我武者羅で我儘な子供のように視えた。

「聞き入れた？　貴女の願いは『鬼になる事』ではないでしょう？　とうとうそこまで妄想に囚われましたか」

そして、三石きこはもう一度、拳をななかに向けて振り上げる。

しかし、それもななかは寸での所で避ける。

その後も何度も何度も、殴りに行くも拳は虚しく空を切るばかり。

それを避けながらななかは口を開く。

「三石さん、貴女って直情過ぎますわ。もっと大人になりなさいな。ああ、いえ、違いますわね――」

「現実見なさいな」

そして、ななかは前に突き出された三石の拳を、しゃがむ様に避け、何重にも強く多く巻かれたスプリングのように、雑草の中を縦横無尽に飛び跳ねる飛蝗のように、力強い跳躍で、その細く長くしなやかな足をバネにして、三石の顎に頭突きをかました。

ず、頭突きって……、どこぞの不良漫画とかじゃないんだから。

しかし、その一撃は、三石を気絶させるには至らなかったものの、僅かだが隙を作るのには十分な威力だった。

傍から見ても分かるような事なのだ、ななかがその隙を見逃すわけもない。

その一瞬の隙にななかは、ついでとばかりに頬にビンタを入れ、風船が割れたような炸裂音が廃病院の壁に反響する。

立て続けにビンタを入れようと、ななかは手を振るうが三石はその鬼の力を用いて、一回の跳躍で二十メートル程、距離を取った。

そして三石は僕と同じような疑問をななかに向けて投げかけた。

「な、なにそれ」

そんな、この場になんとも単純で、もっとも相応し過ぎる疑問に、ななかは屈伸をしながら答える。

「人間やればなんでもできる。という事ですわ、三石さん」

屈伸をし終えたななかは笑みを浮かべながら、言葉を続ける。

「鬼が出てくる物語といえば、やはり有名なのは『桃太郎』だと思います。ええ、私も絵本とかで拝見させて頂きましたわ。私、あの話が大好きなのですよ。だって、鬼なんて架空の存在が、犬、猿、雉なんて動物にボッコボコにされてしまうんですもの。爽快愉快痛快なお話ですわよね」

その話しの意味を理解した三石は、苦虫を嚙んだように顔を顰める。

「ですから、私もそれを見習いまして、貴女の事をボッコボコに、のしてしまおうかと思うのですよ。聞き分けのない子供に折檻する母親のように人間風情溢れる程度にのしてあげようと思うのですわ。ああ、感謝はいりませんわよ。猿のように機敏に、雉のように優雅に、犬のように従順に、貴女をのしてあげますわ。」

「この、純情、純粹、純真、純然、純良、純正、純潔で至純、清純たる純国産の乙女、仙夕ななかにお任せあれ」

（続く）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7430h/>

現写録～現に生ける～

2010年10月9日07時04分発行